
ヴァンパイア・イン・ザ・スクール

青牙 ゆうひ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァンパイア・イン・ザ・スクール

【Nコード】

N1979N

【作者名】

青牙 ゆうひ

【あらすじ】

葛葉清秋は通学途中に一体の死体を目撃したことから非日常な世界に巻き込まれる。

午後六時以降に活動が始まる部活動『オカルト部』。その部長である清水出美に吸血鬼退治を命じられる。

誰が人間で誰が化け物なのかわからない中、清秋は生き残ることができるのか。

第一話：非日常の始まり

葛葉清秋はどこにでもいる普通の高校生である。くずはきよあき

紀近高校に在籍する高校一年生で、入学してから約一カ月たったところだ。つまり現在は五月ということになる。

学校にも慣れ始め、友達もそこそこできた。

部活に入っていないが、放課後は数人の友人と共に近所のゲームセンターやカラオケに行ったりと学生生活をそれなりにエンジョイしている。

成績はおそらく中の中ぐらいで運動神経も全国平均ぐらいだろう。まだ中間試験も始まってないのでわからないが、入学試験の成績を見る限りそんなもんだろうと清秋は思っている。

そんな平凡に足をつけたような高校生、清秋は全力疾走をしていた。

前述した通り彼はごく普通の高校生なので、誰かに命を狙われているとかそんなことは全くない。ただ単に朝起きるのが三十分遅かっただけである。

現在清秋は遅刻するかしないかという瀬戸際である。

彼の家から高校までは自転車を十分ほど走らせたところにあり、近さゆえにこの高校を選んだといっても過言ではない。

なので三十分程度の寝坊で遅刻するようなことはない。しかし不幸には不幸が重なるもので、今朝家のガレージから自転車を出してきたところ完全に後輪のタイヤがパンクしていたのだ。

現在時刻は八時二十五分。

清秋は左腕の時計を確認する。つい先ほど通り過ぎたコンビニがだいたい自宅と学校との中間に位置するので、あと十分ほどで到着するはずである。

「明らかに間に合わない……」

頭の中でどうにか時間内に到着できないかと思いをめぐらせてい

ると、右前方十メートルほどの位置に公園の入り口が見えた。

普段は自転車に乗っているので通らないが、確かこの公園を斜めに横断すると学校までの近道だとか聞いたような気がする。

一秒で判断して右折する。

入口にあった車止めのポールを一気に飛び越え、『白桃公園』という立て札を横目にスピードを緩めず走り続ける。

公園に入ると一気に視界が開けた。この白桃公園には遊具などはほとんどなく、主に住民の憩いの場所としてよく利用されている。敷地内は主に広場のようになっており、きれいに芝生が手入れされている。

休日には近所の子供たちがサッカーをしたり、犬を走らせたりといった光景が見られる。清秋も小さい頃にはよくここでバーベキューなどをしたものだっただ。

公園の東側には雑木林が広がっている。

雑木林といっても桜やイチョウ、クヌギといった季節によって花が咲いたり紅葉したりする木々が五、六メートルずつ人口的に植えられているもので、春や秋は花見や紅葉狩りといった行事にもつかわれている林だ。

「ん？」

と、そこで自分の進行方向に小さな黒い物体が動いているのを確認した。

近づくにつれてその輪郭がはっきりする。

三角の大きな耳。二つの黄色い眼玉には縦長の楕円型に黒目がついている。黒い毛皮に包まれた胴はしなやかで、尻尾を真上にピンと伸ばしてこちらを見ていた。

まごうことなき黒猫である。

こちらから近寄れば勝手に逃げるだろうと思いながら、猫の右側を通りぬけようとする。

しかし、前方の猫も同じ方向に移動した。

仕方がないので次は左に避けようと、少し右足を踏ん張って左に

進路を変える清秋。

やはり同じように清秋の進行方向に体を移動させる黒猫。

右へ左へと繰り返しているうちに一人と一匹の距離はどんどんと縮まっていく。

相手が人ならば、お互いが避けようとして二人とも同じ方向に避けるというのはよくあることである。そして最終的にどちらも一度停止してから、少し気まづくなつてすれ違うだけである。

しかし今回の相手は人間ではない。

とりあえず猫の前方一メートルぐらいで停止した清秋は――もちろん気まづくなるということはないが――、避けて進もうとした。

しかし、やはり猫は清秋の進行方向に立ち向かった。

「なんだおまえ？　僕を通したくないのか？」

「にゃー」

話しかけてみると、その小動物は返事をするように一声鳴いた。首輪は付いていないが、どこかの飼い猫なのか人を見ても逃げないらしい。

「それでも僕はすごく急いでいるんだ。お前と遊んでいる暇はない。」

話しながらも左右に避けて進もうとする清秋。しかし、黒猫は断固として道を通さないつもりらしい。

時計を確認すると、残り時間はあと三分を切っていた。

「さすがにこれ以上足止めされるのはキツイ。そろそろ抜けさせてもらう。ぜっ！」

「にゃう！！」

清秋は猫の上方を飛び越えた。

予想外の動きだったのだろう、黒猫は飛び上がるがそのころには清秋ははるか後方に着地し、そのままの勢いで走りだしていた。

もう諦めてしまったのか、黒猫は後を追ってこない。

それにしても変わった猫だと思った。あんなに必死になって道をふさぐ猫など清秋は今まで見たことがない。

「まっ、いつか。とりあえず今は遅刻しないようにしないと」

清秋はさらにスピードを上げた。前方には雑木林。一気に木々の中に身を投じる。

先ほどまでの開けた場所とは違い、一定の間隔で植えられている多くの木々達。

五月の中旬となると青葉が生い茂り、林全体が緑色になったように感じた。

人口林とは言え、自然の中にいると何となく心が安らいだ。これがマイナスイオンとかいうやつなのかと、エアコンのテレビCMを思い出しながら清秋は走り続ける。

だがそこで

「うおお!？」

何かが足に引っかかり、持ち上げようとした右足の運動を完全に停止させた。

もちろん右足だけが止められただけで上半身は慣性によりそのまま前へ進もうとする。

「ぶへあ!!」

急降下する頭を守るために左手を前方に出して衝撃を和らげた。

そのおかげで顔が地面と衝突することはなかったが全身が土まみれになるほどの大転倒である。

受け身を取った左手が少し痛むのを我慢しながら、自分が引っかけてた右足を見た。

はいていたスニーカーは完全に脱げて横に転がっている。数センチ横には自分が足を引っ掛けた何か黒い物体が木の陰からのびていた。

始めは何かわからなかった。

林の奥の方まで入ってきたため、辺りの雑草は放置されているため伸び放題で、倒れたままの清秋の視線からはほとんど確認できなかった。

とりあえず立ち上がり、自分の靴を拾いながら黒い何かを確認す

る。

もとの色が分からなくなるぐらいまでボロボロになったスニーカーがつま先を地面に突き刺すように立っていた。

もちろんこんなスニーカーだけでは足を取られるほどの重量も無く、そこからは人の足が伸びていた。

グレーのズボンの裾だけ見えたが、清秋のいる方向からでは木が邪魔でその先が見えない。

あれだけ激しく足を引っ掛けたのにぴくりともしないのは明らかにおかしい。

気味が悪く逃げ出したい気持ちもあったが、万が一のことを考えると確認せずにはいられなかった。

ゆっくと二、三步後ろに後退していく。嫌な汗がこめかみから顎のラインをなぞっていくのがわかった。

どうせ酔っぱらったホームレスが寝床に帰らずにそのまま公園の林の中で寝てしまったのだろう。

邪魔になっている木を右から回り込み、最悪の考えを振り払いながら清秋はそう考え、そうであってくれと願った。

しかし人間というものは、最悪の考えほど見事に的中させてしまうもので――

清秋の視界には予想した通りの『最悪の結果』が待っていた。

鳴り響く学校のチャイムの音は、今回の事件の始まりを告げているようだった。

第二話：紅の雨、白い部屋

清秋の目に飛び込んできたのは一人の男の死体であった。

グレーのズボンを履き、少し大きめの上着を着ている。

ただ、来ている服はすべて裾が擦り切れており、元の色が分からなくなるほど汚れていた。ほぼ間違いなくホームレスだと考えられる。

禿げかけの頭は少ない髪の毛が伸び放題になっており、顔はところどころしわが目立つ。

土などで薄汚れているのを差し引いても、歳は四十から五十代であらう。

しかしこれだけだと、ただの汚らしい男性が草むらで寝ているだけである。清秋がこの死体を死体であると断定したのは明らかな理由があったからだ。

まず、目が完全に見開かれていた。

昔、清秋はテレビで前を開けたまま寝る男というものを見たことがあるが、普通あんな状態で寝ることができる者などそうそういないだろう。

そして何よりも男の死を確信させたのは、首元にある大きな傷である。

傷口は布が裂けたように大きく口を広げており、白い筋のようなものが見えている。

周りの地面や木が真っ赤に染まっているところを見ると、血液は勢いよく噴き出したのだろう。

胃の方から苦い液体がこみ上げてくるのを感じる。

あまりにも衝撃的な光景を目の当たりにしたためか、意識はあるものの頭が完全に機能を停止しているような気分だった。

やばい、遅刻だ。でも今から急げば一限には間に合う。早くこの場から離れなければ。でも目の前に死体が。今からでも救急車を呼

べば間に合うかも。しかし今の状況だと警察の方がいいのか？

清秋の頭の中に色々な考えが交錯する。全身が震えているのが分かった。

やはり警察を呼ぼうと携帯を取り出し、一一〇を押す。

腕の震えを抑えるように携帯を耳に力強く押しつける。1コールも鳴らずに電話が取られた。

『一一〇番です。どうしましたか？』

落ち着いた男の声だった。

「め、目の前に、人が……、血だらけで」

上手く言葉がでてこない。

『落ち着いてください。あなたは今どこにいますか？』

「白桃公園で……」

そこで清秋は言葉を失った。

死体の頭がピクリと動いたのだ。手から携帯電話が滑り落ち、地面に落ちる。

「おい、生きてるのか？ 意識があるのか！？」

駆け寄って問いかけるが返事はなく、かわりに頭がビクンと痙攣した。

頭だけではない。肩、腕、胴、足と脈を打つようにビクンビクンと痙攣し始めた。

男の体が跳ねるたびに周りに血しぶきが飛ぶ。体内にはまだ血液が多く残っていたようだ。

数十秒ほどで痙攣はおさまり始め、男の体は完全に静寂を取り戻した。

気づくと、清秋の体にも大量の血液が飛び散っている。

べっとりとした血液と先ほど走ったために流した汗とが混ざりあい、体中が虫に這われている様に気持ち悪い。

やがて喉の奥からこみ上げてくる物を抑えられなくなり、その場で吐き出した。吐瀉物が地面に出来た血だまりと混じり合う。

呆然と座りこんでいると、さらに何かが動いているのが目に入っ

た。

男は完全に息絶えたらしく、動いていない。動いているのは目の前の血液である。

気づくと、手や顔に付いた血液が消えていた。地面を見ると、地面の上をナメクジのように血の塊が動いている。

周りに飛び散ったものも同様に一つの場所に集まろうとしている様だった。

目の前の吐瀉物と混じった血液も分離し、段々と大きくなっている。どうやら他の血液はここに集まっているようだった。清秋はただ見つめるしかできなかった。

やがて目の前にある血液は上方に膨らみ、球状になった。球状といっても底面は平べったくなくっており、紅い饅頭のような形だ。形は丸いものの血液は流動しているらしく、ドクンドクンと脈打っている。

ゆっくりと渦を巻き始め、角のようなものが生えてくる。そして一瞬震えたかと思うと。

清秋に向かって真っすぐと跳んできた。

「危ない!!!」

後ろから誰かの叫び声が聞こえ、同時に頭に重い衝撃がはしる。

清秋は頭から地面に突っ込んだ。目の前を星が舞っている。

かなり強く打ちつけたらしく視界が段々かすんでくる。

そこで頭の鈍痛とは別に首筋に鋭い痛みがあるのに気付いた。まるで刃物で切り付けられたような痛みだ。

段々と視界の端から暗くなっていき、完全に清秋は昏倒した。

目が覚めて始めに飛び込んできたのは、真っ白な天井であった。

真っ白な壁紙の部屋で、布団も白。首を横にひねると小さなテレビがあり、下部にデジタル表示の時計が見えた。

時間は十八時一七分を表示している。

どうやら半日以上意識を失っていたらしい。

状態を起こし、周りを見回すと案の定病院の個室である。

「っ痛う……」

体を起こすと頭に痛みがはしった。どうやらあの出来事は夢ではなかったらしい。

「目が覚めたかね？」

ふと気がつくテレビがある方とは逆の方に初老の男性が座っていた。

グレーの背広を着て上から白衣を羽織っており、白髪交じりの髪を無造作に後ろへ流している。

顔の骨格は四角く口元や眼がしらにはくつきりとしわが刻まれており少し恐くみえるが、たれ気味の目はどこか安心させるようなものがある。

座っているので背丈はわからないが、おそらく一六〇〜一七〇センチぐらいであろう。

「いやあ、すまないね。本来ならここにいてべきなのは君の親御さんなんだろうが、少し急ぎで聞きたいことがあってね。おっと、忘れてた。私は前まえ寫しといつてこの病院で医者をしている」

前寫と名乗った男は白衣の胸ポケットにある顔写真つきの名札のようなものをつまんで清秋に見せた。

「葛葉清秋です」

ああ知っているよ、というように前寫はこくりとうなづく。

「君に聞きたいことなんだが……、君がああの男性の死体を見た時はまだ血だらけだったんだね？ いや、無理に思い出さなくてもいいんだが」

「血だらけでした。首に大きな傷があって、僕が見た時もそこから大量に血が出ていたのを覚えてます」

草むらの中に倒れている男性の首筋にあった生々しい傷跡を思い出し、軽く吐き気をおぼえる。

「そのあとは……」

「その後。その後何があったんだい？」

「誰かに頭を殴られたみたいでそのまま気を失いました」

清秋はその後起こった不可解な現象を話さなかった。

あのまま気を失ったため、夢と現実が混同していた可能性もあり、たとえ話したとしても信じるわけがないと思ったからだ。

むしろ自分でも信じがたい出来事だし、夢であってほしいと思った。

「そうか。まあもし何か思い出したことがあれば言ってくれ。どんなことでも力になるよ。たとえ信じられないようなことでもね」

「……はい」

心を見透かされたような気がして清秋は一瞬ひやつとした。

しかし前寫の微笑を見る限りそこまで裏はないように思える。大方頭が混乱している患者に対して優しい言葉をかけたただけだろう。

「あ、あとさっき警察の人が来ていたよ。君がまだ気を失っていたから帰ってもらったんだが、一応渡しといてくれと言われたよ」

席を立とうとした前寫はポケットから小さな紙を取り出す。どうやら名刺らしい。

名前は『山口悟』と書かれていおり、裏を見ると携帯の電話番号が書かれている。

「事件について聞きたいことがあるらしい。まあ無理をすることはないさ。夕方ぐらいまではここでゆっくりしていきなさい」

そう言って前寫は席を立ちドアの方に歩いていく。顔は少し恐いが頼りになる先生だと清秋は感じた。

もしかしたらあの後起こったことを話しても信じてくれるかもしれない。出て行こうとする前寫に声をかけようとする。

「あの……」

言い出したところで病室のドアが開けられた。前寫が開けたわけ

ではなく、ドアが外側から開けられたのだ。出しかけた言葉をのみこむ。

「ここが葛葉清秋君の部屋であっているかな？」

入ってきた声を聞くとどうやら女性らしい。

前寫の陰になって見えないが長い髪がドアの向こうで揺れるのが見えた。

「あってるが、君たちはだれだい？ 葛葉君のお友達かね」

「そうです。葛葉君が倒れたと聞いてお見舞いに来ました」

もう一人別の声が聞こえる。こちらも女性で自分の友達を名乗っている。

しかしこのような声の女性の知り合いなどいたのだろうか。

そんなことを考えているうちに病室のドアが閉まった。前島は出ていき、代わりに立っていたのは二人の女性であった。二人とも清秋と同じ高校らしく、紀近高校のブレザーを着ている。

「君が葛葉清秋君だね？」

「はい、そうですけど」

ドアの前で始めに話していた女性が話しかけてきた。

背丈は清秋と同じぐらいだろうか、女性の中では長身に入るだろう。

少し赤みがかった髪は腰付近まで伸ばされており、まったく言うていいほどみだれがない。

鋭い眼はまるで全てを見透かしているようだった。

「私の名前は清水出美。しみずいづみそしてこっちが佐々木雀。ささぎすずめ私の助手のようなものだ」

「佐々木雀です」

出美の横で立っていた女性はぺこりと頭をさげた。髪の毛は茶色でこちらもロングヘアだが、後ろで一つに束ねている。容姿は標準的で少し釣り目。左目の下にはなきばくろがあり、さらに右目には片眼鏡が付けられている。

「いやー、探すのに苦労したよ。君が倒れたのは授業が始まってか

らだったからね。連絡を受けたのはいいが、その時は授業が始まっ
ていてね。一限と二限の間に上手く抜け出して……」

「出美部長。話は後にしましょう」

横で黙って立っていた雀はぺらぺらと話している出美を制止した。
「すでに二十パーセントほど浸食されてます」

落ち着いた様子で右目の片眼鏡をいじっている。何かダイヤルの
ようなものがついているらしい。

清秋は混乱していた。登校中に不思議体験をしたと思ったら突然
意識を失い、眼が覚めたら謎の女性二人が病室の中に入ってきてよ
くわからない会話を繰り返している。

「ほう、かなりペースが速いな。それならば仕方がない。さあ葛葉
清秋君、着替えて退院の準備だ」

「ちょ、ちょっと待ってください。言っている意味が分かりません
もつと分かりやすく説明してください」

「今は話している時間はない。とりあえず一緒に来てもらって、適
切な処置をしてからだ」

胸の前で腕を組みながら出美は答える。初対面なのに有無を言わ
せないような態度だ。

しかしいくら高圧的に出られても、突然現れた不審人物について
いくわけにも行かず、清秋は答える。

「お断りします。まず理由を話してもらわないと僕は動けません。

第一、まったく初対面の人に突然ついてこいなんていわれてもっ……
…!？」

そこで清秋の言葉は遮られた。

突然体が浮き、壁に抑えつけられたのだ。

言葉が出てこない。まるで首を腕でつかまれたように息が苦しか
った。

「あまり手荒にはしたくなかったんだがね。さて、もう一度聞こう。
私たちについて来たまえ。理由は後できちんと話す。危害も加えな
い。まあ、ここで君が断ったとしても無理やりつれていくのだが……

…。さて君の答えはどうかかな？」

依然腕を組んだままの出美は、清秋に問い返す。声色は優しく諭すようだったが、どこか圧倒的な支配力のようなものを感じた。

「別にあなたの不利益になるようなことはしません。素直についてきてもらわないとあなたも私たちも被害をこうむるだけなんです」

雀が出美のとなりで淡々と説明するが、少しあわてているように見えた。

まさか出美がここまでするとは思ってもいなかったのだろう。

確かに悪い人ではなさそうだし、理由も後で話してくれるらしい。なにより、今のこの状態は息苦しいし、首に圧力がかかっているせいか意識がもうろうとしてきた気がする。

「わ……かりました。ついて………行きます」

「そう言ってもらえるとうれしいよ」

出美はにやりと笑う。清秋の体を壁に押し付けていた圧力は消え、そのままベットに自由落下した。

「それでは外で待っているのです、すぐに用意して来てくれ」

閉められた病室のドアをしばらく見つめた後、清秋はゆっくりと支度を行い出美達の後を追った。

第三話：オカルト部

半ば無理やり病院から連れ出された清秋は、出美が待たせていたタクシーに乗せられ、あるところに連れてこられた。

「ここって……」

「ああ、君もご存じの通り紀近高校だ」

病院からタクシーを二十分走らせて、到着したのは清秋の通う学校である紀近高校であった。

「まあ詳しい事は後で話すとして、とりあえずついて来たまえ」

そう言うとお出美は紀近高校の目の前の門をくぐった。

紀近高校は緩やかな傾斜地に建てられた高校であるので、校舎は道路より少し高い所に建てられている。そのためか、門を入るとすぐに坂道が数メートル続く。その坂を上ると小さな広場になっており、中央には気が数本植えられ右端には数台の駐車スペースがある。出美を先頭にして後ろに雀、清秋というように、まるでRPGのように一列になって校舎に沿って歩いていく。

「あの、どこに向かってるんですか？」

渡り廊下を横断して、前方に体育館を見ながら清秋は質問すると、出美の代わりに雀が答える。

「私たちの部室です。オカルト部っていう部活なんですけど、聞いたことありませんか？」

清秋は首をひねる。先日体育館で行われた部活紹介の記憶を掘り起こしてみたが、それらしい部活は聞いたことがない。多くの部活が下駄箱付近で行っている勧誘でも見かけた覚えもない。

「無理もないさ佐々木雀君。我々は勧誘活動を行っていないからね。ただの興味本位で入られてもこまるのだよ。能力のあるものだけこちらから勧誘するだけだ」

「能力？」

「さあ着いたぞ」

体育館を回り込んだ所には小さなプレハブがあった。他の部活の部室がある部室棟と体育館の間に配置されており、最近立てられたのだろう少し他の校舎に比べて汚れが少ない。ドアはアルミ合金、壁はところどころ鉄骨がむき出し、屋根はルーフデッキ、非常に簡素な造りである。

「詳しい話の中に入ってからしようじゃないか。お茶ぐらいはご馳走するよ」

ドアと同じく金属製のノブを捻り、出美は〈部室〉の中へ案内する。

「……え？」

そこで清秋は言葉を失った。

先ほどドアの前で見たのはお世辞にも豪華とは言えないような粗末な造りの建物だった。

しかし一步中に入ってみると、まるでどこかの社長室のような内装だった。入って正面には木製のデスク、黒い革製の肘掛椅子。その手前には長方形のテーブルが配置されており、それを挟むようにしてソファアがある。さらに右側の空間を見ると、本棚やクローゼットのようなものも見られた。

「外装は教師や他の部活とかからクレームがくるから始めのままですが、内装だけは変えさせてもらいました」

まるで清秋の心を読んだかのように雀が説明する。

「いつまでも突っ立ってないで座りたまえよ君たち。おっと佐々木雀君は客人君にお茶を入れてあげてくれ。それとも葛葉清秋君はコーヒーの方が好みかな？」

「お茶で大丈夫です」

「ということらしいからよろしく」

かしこまりましたと言い、お茶を入れに行く雀。まるで喫茶店の店員のような動作で隣の小さな部屋に入って行った。どうやら給湯室のようなところがあるらしい。

改めて部屋を見回してみると雀の言った通り改装したような跡が

見られる。ドアや窓枠などは外と同じアルミサッシになっているし、先ほど雀が入って行った給湯室も後から壁で囲って小部屋を作ったようになっている。

「いつまできよろきよろとしているんだね？　そろそろ本題に入ろうじゃないか」

出美はいつの間にか奥の肘掛椅子に腰かけ、机に肘をついて両手を組んでいる。

「まず先に結論だけ言おう。君は吸血鬼に襲われた」

「きゅうけつき？」

「そう吸血鬼。ヴァンパイアとも言うね。まあ正確に言うと、君を襲ったのはヴァンピールというものでね。吸血鬼の手下のようなものさ」

清秋にはまったく意味が分からなかった。いきなり吸血鬼やらヴァンなんたらやら言われてもわけが分からない。

「あなたは伝説の怪物である吸血鬼に襲われて毒を入れられた。そして汚染されたあなたの人間としての血液は時間とともに吸血鬼化して、最後にはあなたも伝説の怪物になるわ」

お茶くみから帰って来た雀がカップを清秋の前に置きながら話に加わる。お茶はお茶でも紅茶だったらしい。高そうなティーカップの中に、真っ赤な液体が入れられている。

「何言ってるんですか？　吸血鬼なんているわけない」

「いいえいるわ。吸血鬼だけじゃない。妖怪も幽霊も、超能力者や魔法使いだっている。あなたが知らないだけでこの世界にはまだまだ未知なるものが隠れているのよ。それに否定するならまずあなたの今日目にしたものを否定しないとね」

雀はそう言うソファに座り、三つの紅茶のカップをそのままテーブルの上に置いた。もちろん一人だけ違う机に掛けている出美からは届かない距離にある。「佐々木雀君の言う通りだよ葛葉清秋君。ではまずは目の前の事から説明してくれたまえ」

出美は机の上にある紅茶のカップ、正確に言うと机の上にへあつ

た」カップを指差す。

それは清秋の前で浮いていた。赤い液体の入ったカップは清秋のちょうど眼の高さまで上昇している。糸でつっているようには見え
ず、見えない手によって持ち上げられたようだ。

「さあ葛葉清秋君、そのカップはどのような仕組みで浮いているの
かな？」

「……」

視認できないほど細い糸で吊っている。テーブルとカップに磁石
が入っている。そんなありきたりな仕掛けぐらいしか清秋には思
つかない。しかし、この距離で目視出来ないような糸など存在する
はずがないし、磁力でこんな安定した浮遊ができるわけがない。目
の前で起きている現象はあまりにも非現実的であった。清秋の目の
前に大きなテレビが置かれており、眼に映っているのは全てその映
像だと言ったほうが納得する。

「これが私の能力《自由自在》コントロール」。視認できるものならどんなもので
も操作することができる。ちなみに病院で君を壁に押し付けたのも
この能力だ」

清秋の目の前で静止していたカップは、そのまま出美の前まで移
動していった。

「それで吸血鬼に襲われたところまで話たかな。そう、君を襲った
のはヴァンピール。おそらく真っ赤な獣か血を入れたビニール袋の
ような姿をしていたと思うんだが」

「動く血の塊でした」

球状になった脈を打つ血の塊。渦を巻き始め、襲いかかってきた
時の光景を清秋は思い出す。

「うむ、やはりうそうか。このヴァンピールというのは、吸血鬼の
血液から作られる。意思はなく、吸血鬼のために人間の血液を集め
るんだ。ただ不可解なのはそいつが君を生かしているという点だな。
普通は血液を全て吸いつくすはずなんだが」

「誰かに助けられました」

「助けられた？」

「はい、そのあと気絶してしまって顔は見えていませんが、声は女性だったと思います。後は……」

清秋は後ろから声をかけられたのを思い出す。後ろから声が聞こえて振り向く前に頭に衝撃がきた。点滅する視界に映ったのは確か。「後は、そう。金髪が見えたような気がします。意識がはっきりしてなかったので断定はできませんが」

「金髪か。一応調べておこう。しかしどうやってヴァンピールを撃退したのだろうか。一般的にあいつらも吸血鬼と同じく不死身のよなものなんだが」

紅茶を啜りながら出美は難しい顔をする。会話が切れたので清秋も同じように紅茶を口に含んだ。喉を熱い液体が通り、少しの苦みと共にさわやかな香りが鼻の奥を刺激する。

しかし考えてみると怪しいものである。先ほどの話しが本当で吸血鬼が存在するとして、出美達はなぜ自分をこんなところに連れてきたのだろうか。

「まあそれは置いて、治療を開始しよう」

そう言うと、出美は机の引き出しを開けて何やら取り出した。

「さっきから言ってる治療って何なんですか？」

「襲われた時首筋に傷を負っただろう？ 先ほども言った通りヴァンピールは吸血鬼の血液からできているからね」

「というと？」

「その傷から吸血鬼の血液が入り込み、吸血鬼になってしまうんです」

横で黙っていた雀が答えた。先ほどから回りくどい出美の説明を良いタイミングでフォローしてくれる。まるで秘書のようだ。

「それでこの薬の出番だ」

出美の方に視線を戻すと、先ほど机から取り出したらしい注射器をくるくると回していた。まるで能力とやらを見せびらかすように、宙に浮かばせている。

「なんですか、その怪しげな薬は」

注射器の中には何やら赤黒い液体が入っており、明らかに怪しい。
ヴァンパイアゲノムデストロイヤー

「『吸血鬼化緩和剤』と呼ばれているもので、吸血鬼化を遅らせる薬です」

「カタカナ読みにしたことで一気に怪しくなったぞ!? あんた嘘つきの苦手だろ!!」

「……」

雀はあさっての方向を向いてしまった。

今のはこの人なりの冗談だったのだろうか。この重い雰囲気をごませようとしたとか……。そう考えたが、この佐々木雀という人物は表情を読み取りにくいので判断のしようがなかった。

「まあ半分ぐらいはあっているさ。君の今の状態だとこの薬を打つしか方法はないのだよ。ただ、これはかなりの苦痛を強いるのでね、痛みを緩和する薬を君の紅茶に入れておいた。簡単な麻酔みたいなものさ」

「ちょ、ふざけるなあんだ! 意識のない間にそんなよくわからない薬を打つ、気……か」

まるで出美の言葉が引き金になったかのように、清秋は意識が朦朧もろうとしてくる。

「引き延……三日……だ。その間になん………ようにしよう。……また明日の同………時間にここに………」

出美の声が切れ切れに聞こえる。薬を盛るなら話がおわってからにしろ。と言いたかったが口がうまく動かなかった。

右腕に何かが刺さった感覚があり、そこから段々熱くなってくる。恐らくここから本格的に痛みが増してくるのだろうが、ここで清秋の意識は完全になくなった。

第四話…小休止

携帯のアラームの音が聞こえる。自分が目覚まし代わりにいつもセットしているものである。朦朧とする意識の中で目を開けずに手探りでアラームを止める。

すごく嫌な夢を見ていたような気がする。たしか朝から謎の怪物に襲われて……

「兄さん、やっと起きたの？ 早く用意しないと遅刻するよ？」

記憶の糸をたどっていると、部屋のドアが内側に少し開かれた。そこからひょっこりと顔を出したのは、ボブに切りそろえられた髪を揺らし近所の中学校指定の制服を着た少女。清秋の妹である葛葉 柚花だった。

「ああ、今から行くよ。ていうか柚花、なんでもう鞆なんか持つてるんだ？」

ドアの隙間から見える柚花の足元には学校指定の通学鞆が置かれている。

「今何時だと思ってるの？ もう七時半過ぎてるわよ」

「はあ？ だってアラームは七時にセットしてたはずじゃ……」

携帯の画面を見ると《7…31》と表示されている。どうやら三十分以上鳴り続けていたらしい。

「分かったら早く起きてね。あと鍵はちゃんと閉めて行くように。んじやいってきまーす」

ドアが閉められ、階段を下りて行く足音が聞こえた。

少し呆けた後、もう一度思考を戻す。そう言えば自分は昨日どうやって帰って来たのだったか。確か清水出美なる女性に菓を盛られて意識を失ったはずだ。その後運んでくれていたとしても、柚花に気づかれずに部屋まで連れてくることなんてできないだろう。

「やっぱり夢だったのかな？」

気絶するほど頭を強打したのに何もできていなかったし、首筋を

触っても襲われたときにできた傷もなかった。しかし夢にしては記憶が鮮明である。死体の血の色、強烈な衝撃、病院や学校で聞いたセリフなど、全てを完全に覚えていた。

「おっと、遅刻遅刻」

時計を見ると七時四十五分を過ぎていた。昨日の出来事について考えるのは後にして、とりあえず急いで学校へ向かうことにした。

「大丈夫だったか、昨日？」

清秋の前方では心配そうな顔をしている園山弘樹がいた。

「ビックリしたしただ。まさかお前が学校を休むとはな。小学校以来じゃないか？」

「いや、中学の時に一回だけインフルエンザになって休んだよ」

現在、清秋は自転車の荷台にまたがっている。

自転車のパンクを直していなかったので、今日も全力疾走しようとしていたところに、今自転車の動力となっている弘樹が通ったのだ。

園山弘樹。清秋の小学校時代からの友人で剣道部員。長身で顔の彫りが深いため、見た目は恐い人物だと思われがちであるが、人当たりの良い性格で友達も多い。

「なんでも全速力で大転倒したあげく、電柱に頭をぶつけてさらに車に撥ねられたとか……」

「本当にそれが全部事実だとしたら僕は生きていないか、少なくとも重体で入院ぐらいはしているんだと思うんだが」

「冗談だよ。でも派手に転んで頭を打って意識がなかったから救急車で運ばれたって聞いたぜ」

「誰が言ってたんだ？」

「先生」

学校ではそういうことになっていたらしい。本当に頭を打っただけだったのだろうか。それならそれで柚花はもう少し心配してくれでもいいんじゃないかと清秋は思った。

「なんだお前、覚えてないのか？　まさか頭を打った拍子に記憶喪失とか。お、到着したぜー」

弘樹は冗談っぽく言ったが、案外その線で考えた方が自然なんじゃないかと清秋は考える。頭を打ったため病院へ運ばれて、その後お見舞いか何かにきた柚花に連れて帰られ部屋で寝かされた。その間の記憶がないのは頭を強打した後遺症のようなもので、昨日起きたと思っていた出来事は全部夢だった。清秋はそう考えながら自転車を降りる。

自転車置き場はグラウンドの西側にあり、自転車通学の学生が多いため結構広いスペースを確保されている。それでも今のように入時二十分を過ぎると、自転車であふれかえってしまう。

弘樹が空きスペースを探しにいつている間、グラウンドを挟んでちょうど対角線上にある体育館に眼がいった。正確に言うとその右側。クラブ棟と体育館の間にある汚いプレハブである。

「どうした、清秋。可愛い娘でも見つけたか？」

自転車を停めて帰ってきた弘樹が話しかけてきた。

「いや、あんな建物ってあったかなと思って」

「ん？　あのプレハブか？　俺たちが入学する時からあったぜ。そうか、お前は帰宅部だから部室棟の方には行かないんだな」

どうでもいいという風に弘樹は学校に向かって歩き出す。

「何に使われてるんだ？」

「俺もよくわからんが、変な部活が使ってるのか。名前は何て言っただかな」

「オカルト部」

自然とその言葉が出てきた。

「そうそう、そんな名前だったと思う。何だ、知ってるんじゃない

か。でそれがどうかしたのか？」

清秋は自分の心臓の鼓動が速くなるのを感じた。まさか本当に存在するものだったのか。昨日の出来事が夢の事なのか本当のことなのかもわからなくなっていた。

「どうした？ やっぱ気分が悪いなら保健室でも行くか？」

弘樹は立ち止り、心配そうな顔で清秋の顔を覗き込んでくる。

「実は……」

清秋は昨日の出来事を話す事にした。朝から謎の怪物に襲われた事。目が覚めると病院にいたこと。清水出美なる女性に半ば無理やり病院から連れ出されたこと。学校で薬を飲まされてそのまま気を失ったこと。

「ぶうアッハッハッハッハッハ」

盛大に笑われた。

「ヒィー、腹いてえ。ありえねえって。清水出美つつたらこの学校の二年でいるけど、絶対そんなことするわけねえ」

「な、なんでそんなこと言えるんだよ」

信じるとは思っていなかったが、ここまで笑われるとは思っていなかった清秋は教室中の視線を集めた弘樹を睨みつけた。ちなみに歩きながら話していたため、今は教室に到着している。

「それに、なんでお前が清水出美のことを知ってるんだ？」

馬鹿にさえたことに対する怒りは一時納めて、自分が昨日会った人物を知っているということに驚き、質問する。

「おまえしらねえのか？ 清水出美って言ったらこの学校一の美人で、勉強も出来てスポーツ万能。俺は才色兼備って言葉をお世辞じやなしで使えるのは、世界でもあの人だけだと思ってるぜ。しかも家はかなりの金持ち。それでいて性格はおしとやかで気配りもできるっていう、どっかの都市伝説みたいな人だよ」

確かに記憶にある出美はかなりの美人であった。しかし、勉強やスポーツ面は分らないとして、お世辞にもおしとやかとは言えな

いだろう。

「まあどこかで清水出美の噂を聞いて、夢の中で変な部活とごっちゃになっただけじゃね？ おっと、もうホームルームらしいぜ」

教室に入ってきた担任を指差しながら弘樹は自分の席に帰っている。

この後、英語の抜き打ちテストの存在により清水出美に対する疑問はすっかり忘れられた。

第五話：清水出美

清水出美とはすぐに会うことになった。

時間は昼過ぎ。清秋はいつも通り講買までパンを買いに行く途中だった。

清秋達の通う紀近高校は四階建ての校舎を並行に三つ並べたようになっており、それぞれの校舎をA棟、B棟、C棟と呼ばれている。各クラスの教室は主にC間四階に一年生、B館三階に二年生、A館二階に三年生となっている。他は主に理科室、図書室などの特別教室。歴史などの選択授業の際に使う空き教室などがある。A棟の隣には食堂があり、パンやおにぎりなども食堂内で販売している。

つまり清秋達一年生の教室は食堂から一番遠いところに位置している。そのため授業が終わると同時に教室を飛び出して食堂に向かわないと、目当てのパンが買えない上に昼休みの半分以上をパンを買う列で過ごすことになるのだ。

そんな理由からA棟一階廊下を全力疾走していたところだった。

角を曲がった瞬間に人がいた。

とっさに判断した清秋はこの勢いで止まるのは不可能と考え踏み出した右足を思い切り踏ん張り、足をクロスする感じで左足を右斜め前に出して急激に方向転換する。なんとか直撃は避けたものの、慣性を完全に捻じ曲げることはできずに、走ってきた勢いのまま肩と肩がぶつかる。

「きゃっ!!」

短い叫び声とともに相手が倒れ、手に持っていた教科書やプリントをぶちまける。清秋も壁に激突し、反作用で倒れる。

「だ、大丈夫ですか!？」

先に起き上がったのは清秋だった。力を入れた際に少し捻ったらしく、右足首がずきりと痛んだ。

ぶつかった相手を見ると一人の女性であった。上履きの色から判

断すると二年生らしい。どうやら移動教室の授業から自分の教室に帰る途中だったらしい。

「たたた。ちょっと転んだだけなので大丈夫です。それよりあなたは大丈夫ですか？ 壁におもいきりぶつかっていたみたいですけど」

「僕は頑丈なんでだいじょう……」

顔を起こした二年生の顔は見覚えがあった。少し赤みがかった髪は腰付近まで伸ばされており、整った顔立ちをしている。まだ座ったままなのでわからないが、背はだいたい清秋と同じぐらいで女性としては長身の部類に入るだろう。

「清水出美？」

目の前には昨日清秋に任意同行させた女性がいた。ただ、昨日とは雰囲気違っており言葉では言えないが、強いて表すなら柔らかい感じがした。

「あら、私の名前を知っているの？ あ、でも年上の人に呼び捨てはだめよ」

「はい、すみません先輩」

「あと、廊下は走らないこと。人だった勢いがついてたら急に止まらないんだからね」

まるで小さな子に言うように注意する。そしてスカート叩いて上品に折りながらしゃがみ込み、散らばった教科書を拾い上げて行く。確かに弘樹の言っていた通りどこかのお嬢様のような人である。昨日見た清水出美とはまるで別の人物のようだった。

「あなたは本当に清水出美さんですか？」

先ほどのやり取りでこの人物が清水出美だと分かっていたが、清秋はもう一度確認する。

「そうよ、私は清水出美。趣味は読書とピアノとインターネット。身長は一六八で、体重は秘密。スリーサイズは……」

「わー！！ もういいです」

「あら、知りたくないの？ 知ってる人なんてほとんどいないのに」
クスクスと悪戯っぽく笑う出美。知っていたら問題だろ、と突っ

込みをいれたいのをこらえながら清秋は質問する。

「今初めてあったみたいに話してまずけど、昨日も会いましたよね？」

「あら、ナンパかしら。私そう言うのはちょっと」

まるで本気にしていない。猫でもかぶっているのだろうか。しかし、話し方や行動からみても嘘をついているようには見えない。

となると

「双子の姉妹でもおられますか？」

ここまで似ているとなると双子ぐらいしか思いつかない。同姓同名の双子というのもあり得ないとも考えたが、清秋には他に考えられるものがなかった。

「私は一人っ子だけど。さっきからどうしたのかしら。私に似た人でも見かけたの？」

一方的に話しているにもかかわらず、まるで気を悪くするでもなく出美は答える。

「似ているというよりも見た目だけはあなたそのものでした」

「……………、少し楽しそうなお話ね。私そういう話大好きなのよ。」

良かったら今から食堂で詳しく教えてもらえるかしら」

そう言うとお出美は清秋に手を差し伸べた。

自分が今だに倒れたまま廊下に座り込んでいたのに気付き、少し恥ずかしく思いながら出美の手を握り急いで立ちあがった。

（あれ？）

そこで何か違和感のようなものを感じたが、清秋の手を引く柔らかな感触により直ぐに分からなくなった。

食堂の中は人で溢れかえっていた。

授業が終わって少し時間が経ってしまったので、入口にある食券の自販機にはあまり人はいなかった。しかし調理されたものを受け取るための列が尋常じゃないほど長く伸びており、入口近くまで来

ている。並べられるだけ並べた長方形のテーブルはどこも満員で、その後ろには席が空くのを待っている者までいた。

席の事は後で考えるとして、出美が食券を買うために自販機に並んだので清秋もパンを買うのをやめて食券を購入することにする。教室において来た弘樹には悪いが昼食は食堂ですませることにした。それにしても、まさか出美と食事をすることになるとは思わなかった。

確かに昨日の件で話したい事はあったが、出美は弘樹があそこまですで称賛するのも納得するほどの美人で、さらに性格もよさそうである。清秋はあまりそういうことには詳しくないので分からないが、おそらく全校生徒から知られているほど有名人物なのだろう。それは先ほどから向けられる奇異な視線からもうかがえた。

ようやくカウンターでランチセットBと出美の分の日替わりランチを受け取った清秋は、席を取りにいった出美を探す。出美の姿は直ぐに見つける事が出来た。窓際の二人席、なかなか良い席である。「ありがと。やっぱり混んでるわね。ちょうど二人分空いていてよかったわ」

出美の対面の席には教科書が置かれている。

「そうですね。先輩はよく食堂に来られるんですか？」

「先輩なんて仰々しい、出美でいいわ。時々来るけど、もうちょっと早く来るから席取りの心配はないわ。清秋くんは？」

「僕は適当にパンを買って教室で食べてますよ。食堂のメニューが安いつて言っても毎日食べると結構な値段ですからね」

「へえ」

そこで出美は清秋のランチセットBをみてクスリと笑う。

「いえ！ たまには贅沢しないといけないかな、とか考えて！！」

今日は男として見栄を張リたかったがために食堂では高い部類に入るランチセットを頼んだのだが、もはや意味をなしていなかった。これならば一番安い上に量もあるカレーにするべきだったと清秋はほんの少しだけ後悔する。

「フフ……。ところでさっきの話なんだけど」

「あ、そうでしたね」

清秋は昨日の出来事について説明する。朝、弘樹に一度説明した内容なので、余り言葉に詰まることも無く説明出来た。

出美は話しのところどころでうなずいたり、合いの手をいれてくれたりとなかなか聞き上手であった。あまりにも興味津津に聞かれるので、話している清秋もうれしくなるほどだ。やはり昨日の清水出美と同一人物とは思えない。

「で、弘樹に話したら夢じゃなかったって言われたんです」

最後に朝、弘樹と話した内容を説明し終わる頃には昼食はすっかり食べ終わっていた。

すると、出美は少し考えてから言った。

「うーん、でも夢にするにはおかしいところがない？」

「というと？」

「だって夢って昼間の記憶を整理する効果があるとか言われてるし、少なからず夢に出てきたものは一度見たことがあるって事じゃない？

もし清秋君が廊下かどこかで私を見た事があったとしても、名前と顔を一致して覚えてるってことはないと思うの。それにそのオカルト部という存在についても全く知識がなかったんでしょう？」

確かにそうである。清水出美やオカルト部が実在しないものならまだしも、出美は目の前に存在しているし、オカルト部というものが実在するということは弘樹からも確認した。

「じゃあ昨日僕があった出美さんは何だったんですか？」

さらに話がややこしくなった。昨日の出来事は夢じゃないとする。しかし目の前の出美は今初めて清秋とあったと言う。

「ドッペルゲンガー」

出美は一言そうつぶやくと話を続ける。

「同一人物が同じ時間に違った場所で目撃される怪現象。日本にも昔は同じような現象があって、『影の病』とも呼ばれていたわ。ただ、これらにすべて共通することは、ドッペルゲンガーとして目撃

された人物は近いうちに死ぬ確率が高いということ。これはドッペルゲンガーが本人を殺すとか、本人になり変ってしまうとか言われているわ」

先ほどまでの上品な彼女はどこへやら、まるで蛇口を一気に全開にしたようにぺらぺらと話す出美。手元にある水を一口飲んでさらに続けた。

「ただ私が考えるに、ドッペルゲンガーというのは生きた人間の魂が何らかの理由によって二つまたはそれ以上に分断されることによって肉体を持たない方の魂が虚像として現れたものじゃないかと思うの。だからもう一人の自分を見たものは自分の魂が不足した不安定な状態に陥るから死ぬことが多い。私はそういう結論に至ったんだけど、清秋君はどう思う？」

「えっと、とりあえず落ち着いてください」

あまりの出美の勢いに気圧される清秋。もしかしたら出美は普通に二重人格なんじゃないかと思うほどの豹変ぶりであった。

「ご、ごめんなさい。私こういう話になるとつい夢中になっちゃって。お化けとか妖怪とか言った話が大好きだから。やっぱりおかしいよね」

「いえ、そんなことないですよ。ただ、珍しいなと思っただけです」一瞬にして元に戻る出美。美人で勉強もスポーツもできる先輩、でも幽霊や妖怪話が好き。考えるとこれぐらいの方がバランスが取れているんじゃないかと思った。十全十美な人などいるわけがないのである。

「だとすると出美さんはこの数日の間に死んでしまうということになるんじゃないですか？」

ドッペルゲンガー説を信じたわけではないが、ここで討論しても違った考えが直ぐに出るとは思えない。清秋はとりあえずその線で考えることにした。

「あくまで私の考えだけど、そのドッペルゲンガーと私が元に戻ったら万事解決すると思うの。ドッペルゲンガーを罵倒すれば助かる

とかいう話もあるし」

「じゃあどうするんですか？」

何となく想像はできたが、清秋は質問する。

すると出美はフッフッフ、とまるで昨日の出美のような不敵な笑みを作り言った。

「今日の放課後にそのオカルト部にいくのよ!!」

第六話：再び部室にて

時刻は五時三十分を少し過ぎた頃、清秋と出美は学校の図書館にいた。

「やっぱりあまりないわね。ドッペルゲンガーについて書かれた本なんて」

放課後に出美と合流した清秋は、昨日のオカルト部部室に行こうとした。しかし出美の「まず相手のことを調べとかないと」という一言によって先に図書館に行くことになったのである。

「そろそろ行かないと下校時間になりますけど」

結局新しく得られた上方はなかった。というか始めから高校の図書館にそんなものがあるわけがないと清秋は思っていたのだが、出美はやる気満々で言うものだからついて来ただけである。

「そうね、下校時刻過ぎてから先生に見つかってもめんどろうだしね」
紀近高校の完全下校時刻は六時十五分である。それ以降は原則的に学生が校内にはいけないことになっている。実際のところ六時が下校時刻なのだが、クラブ活動をしている者は皆その時間から片づけ始めるので十五分までは多めにみるとというのが暗黙の了解のようになっている。

「じゃあ行きましようか」

清秋と出美は図書館を後にした。

図書館はB館の四階にあるので、体育館横のオカルト部部室に向かうとすると一度A館を通るということになる。時計を見ると、長針は文字盤の九と十の間を指していた。この調子だと目的地に着くのは六時になるかならないかということだろう。というかそんな時間に着いても部室を見て帰るだけになるのではないだろうか。そんなことを考えながら前を歩いている出美を見ると、彼女も時間を気にしているらしく、腕時計をちらちらと確認している。

しかし、時間の事を置いておいても無言で歩き続けるのは何とな

く気まずいと思ったので適当に話を振った。

「出美さんは何でこういう話が好きになったんですか？」

ズンズンと清秋を先導していた出美は軽く振りかえり答えた。

「えっと、話せば長くなるんだけど……、私昔から靈感とか強い方だったの」

話している間もちらちらと時間をみながら言う。

「それで、中途半端に気配とか感じるから……、ちょっと興味を持った、みたいな？」

突然歯切れが悪くなる。語尾も疑問形というのも少し気になった。
「何よ、その疑うような眼は。ほら、好きな人をなぜ好きなのか分からないのと同じよ。好きなものは好き、興味のあるものは興味があるのよ」

少し怒ったように頬を膨らませる出美。特に何かごまかしているようには見えなかったが、質問をした時は焦りのようなものが見えたような気がした。

「じゃあそういうことにしておきます。ところで、武器とかっていらなかったんですか？」

「む、まだ信じてないでしょ。まあいいけど」
少し拗ねてしまった。

「武器？ そんなものいらないわよ。もしかしたら私の一部かもしれないんだから、倒す必要なんてないのよ」

「そいつが襲ってきたらどうするんですか？」

「その時は君がいるじゃない。いくら年下だからって男の子なんだから、私よりも力はあるでしょ。あなたが抑え込んでいるところを私がなんとかするわ」

どのように『なんとか』するのだろうか。少し気になったが、そのことを質問する前に部屋前に到着した。時間は五時五十八分。やはりぎりぎりになってしまった。

清秋は改めてプレハブを確認する。昨日と同じアルミ合金のドアと窓枠、外壁はところどころ汚れており鉄の柱が顔を出している。

屋根はルーフデッキで全体をみてもお粗末な造りの建物であった。
前回訪れた際、扉を開けたとたんに別世界になっていたのをまだ
鮮明に覚えている。

「そういえば鍵は……」

ガチャリ、と質問する間もなく出美の手によってドアは手前に
開かれた。

開いた先には昨日とまったく同じ光景があった。

入口の真正面にある木製のデスク、黒い革製の肘掛椅子。その手
前には長方形のテーブルが配置されており、両側にソファが置か
れていた。まるでドアを境にして異空間にでもなっているようであ
る。

中に入って周りを見渡してみる。特に変わった様子はない。テー
ブルの上の花瓶、奥の本棚、まさかクローゼットの中に人が入って
いたりはないだろう。

そこで清秋は気がついた。

（電気がついてる）

入った時は気にしていなかったが、部屋の中は明るかった。部屋
の内装の変化が大きかったため、光に関してはそれほど気にならな
かったのかもしれない。

鍵も空いている、電気もついているとなると人がいることはまず
間違いない。というよりも先ほどから給湯室の方から湯を沸かすよ
うな音が聞こえていた。

出美に目配せをして足音をたてないように給湯室に近づく。

『キーンコーンカーンコーン!!』

校舎中にチャイムの音が響き渡った。六時の下校時刻を知らせる
ものである。しかも部屋のどこかにスピーカーでもあるのか、かな
りの大音量であった。

緊張状態にあった清秋は突然の不意打ちに、ビクウ！と跳びあ

がる。

さらに早鐘を打つ心臓が落ち着く暇もなく、給湯室から人の足音が聞こえた。ゴクリと唾を飲み込む。奥にいた人物が姿を表した。

「あら、ずいぶん早く来たのね」

出てきたのは茶髪ロングの女性。左目に泣きぼくろ、右目に片眼鏡。昨日会った佐々木雀なる人物であった。

手には三つのティーカップを乗せたトレイを持っており、昨日と同じ真っ赤な液体が入っている。

「用意はできています。清秋さん、出美部長」

「いやー御苦労、佐々木雀君」

聞き覚えのある話し方。堂々とした口調が真横から聞こえる。

「ん？　どうした葛葉清秋君。鳩が豆鉄砲食らったような顔をして」
出美はからかうような目を向けてくる。先ほどの『少しオカルトマニアな美人の先輩』とは雰囲気ガラリと変わってしまった。そしてそのままソファに深く腰掛け、手を肩から下に一振りする。雀の持ってきたカップが宙に浮き、そのままテーブルに並べられた。
「僕をだましてたんですか」

清秋は立ったまま出美を睨む。

「そう怖い顔をせずにとりあえず座りたまえ。今日は菓など入れていないからゆっくり話をができるよ」

「信用できません」

そう言うと、出美は少し考たようなしぐさをして、

「じゃあこうしよう。君がこの三つのカップをどれか選んでくれ。その後残ったカップを先に私たちが一口飲もう。これなら私たちに細工のしようもない。まあ飲むか飲まないかはそれから決めればいいだろう。とりあえず座りたまえ、ほら佐々木雀君も」

黙って出美の対面に座った。清秋が座ったのを確認するように雀も出美の左横に座る。

清秋は並べられていた紅茶の内、真ん中のものを取り、自分の前に持ってくる。出美達はそれぞれ自分に近い方のカップを取り、一

口飲むとテーブルの上に戻した。

「さて、先に話しておくが先ほどの私と今の私は別人だと考えてくれ。簡単に言うと二重人格のようなものだ」

「二重人格？」

「解離性同一性障害。出美部長もその一人です」

雀が説明をつけ足す。

「中でも出美部長は特殊なケースで、午前と午後の六時を境にして人格が入れ換わります。昼の人格を『清水出美^{しみずいずみ}』、夜の人格を『清水出魅^{しみずいずみ}』と表記します」

そう言うのとテーブルに置いてあったメモ帳に綺麗な明朝体で二種類の名前を書いた。

「だから今の私は『出魅』の方だということになるな。ここまです何か質問は？」

出美改め出魅は頬杖をついて清秋に聞く。

「じゃあ昼の出美さんは故意に僕をここに連れて来たんじゃないんですね？」

「故意ではないが彼女の意思だ」

出魅は少し考える。どうやら分かりやすい言葉を探しているようだ。

「私と出美は意識の根幹、無意識の記憶や小さな癖などは共有している。一つのコンピュータを二人で使用するようなものだ。私達の頭の中は共有フォルダと個人フォルダにわかれている。その日あった出来事や人の名前などは個人フォルダ、知識などの記憶は共有フォルダに入る」

「例えば人の名前などは出美、出魅個人で記憶していて、英単語やニュースなどの単純な知識は共有しています」

「ただ、個人の記憶がノイズとしてもう一方に出る時があつてな。

出美が君と仲良くなったのも、先に私が君に会っていたからだろう」
なるほど、確かに昼間のなれなれしい態度は初対面の人に対する反応ではない。それに恐らくあのオカルト知識も出魅からのものな

のだろう。

「ということは向こうの出美さんは自分の中にあるあなたの存在に気が付いていないんですか？」

「どうだろうな。そういうのは個人の記憶になるので私にはどうにも……。ただ私が知っている時点で向こう側も気づいている可能性が高いな」

額に中指を当てて考える仕草をする出魅。

出魅の話だと、出美は意識的にしろ無意識的にしろ清秋をここに連れてきたかったということになる。いったいなんのためなのだろう。

「さて、それでだ」

出魅は紅茶を飲みほして椅子から立ち上がる。恐らくこの話は終わりということだろう。

「君の今の状態についてだ」

人差し指をまっすぐ清秋に向ける。

「状態？」

「そう、昨日説明した通り君は今吸血鬼になりつつある。なんとか薬で抑えてはいるものの、明後日の夜ぐらいには完全に吸血鬼となってしまう」

「だから私達に協力してもらいますよ」

出魅のカップに紅茶を注ぎながら雀が言う。

「協力って何に？」

すると出魅は口元をゆがめてにやりと笑う。

「吸血鬼狩りだ」

第七話：前篇二葉

午後七時十五分と少しを過ぎた頃、清秋は夜の公園のベンチに腰かけていた。

公園の名前は白桃公園。昨日清秋が襲われた公園である。「君が囷になって吸血鬼を捕まえてきてくれ」と言って出魅は清秋を一人、夜の街へと繰り出させた。

出魅によると、一度殺し損ねているのだからもう一度現れるだろうということらしい。

命令されるがままにうろうろと街を徘徊してはいたのだが、三十分以上あてもなく歩き続けるというのは想像以上に厳しいものだった。せめて自転車でもあったら楽だったのかもしれないが、あいにく清秋の愛車は家のガレージで修理もされないまま眠っている。

そんな訳で疲れた足を休息させるため公園のベンチに腰掛けているのだが、思い返すと家に帰って自転車を修理に出していればよかったと思う。その方が十分暇つぶしにはなるし生産的だ。囷という本来の役目を果たしてい上に、自分の自転車が直る。

こんな時間の有効活用をなぜ今まで気づかなかったのかと改めて思う。この調子だと週末まで徒歩通学ということになりそうだ。

「あゝ」

後悔の気持と明日からの早朝起床の事を考え、頭を痛くしながら夜空を振り仰ぐ。街灯の明るい光によって星はほとんど見えず、黒い天球には三日月だけがぼつんと輝いていた。

「ん？」

右手に何かひんやりとした感触が伝わった。見ると、鞆の外ポケットからはみ出した銀色の物が突き刺さっている。部屋から出る際に出魅から渡された空気銃だ。

受け取った時は特に気にしなかったがかなり重量感がある。全体が金属でできているようで、銃身は銀色グリップは黒くなっている。

弾倉には金属製の丸い弾が入っていた。

見た感じではエアソフトガンのようなだが、弾丸が金属製ということは改造銃だろうか。ということはもしかすると銃刀法に抵触する可能性がある。威力にもよるのだろうが、武器として持たせたところを考えるとやはり少なくとも人を負傷させるくらいの威力はあるのだろう。

試しに正面にある木に向かって撃ってみることにした。片手で構えると重みのためか少し安定しないので両手でグリップを握り、狙いを定めて前方にある木の幹の中心に向かって引き金を引いた。

ヒュンッ、という空気を切る音が聞こえた。よく外国映画などで聞く効果音だ。

「きゃあー!!」

もしかすると本物のように銃声が響き渡るのではないのかとビクビクしたが、その心配はなかったようだ。どうやら火薬は使用していないらしい。

威力はあまり分らないが、そこまで強いというわけではないらしい。清秋は黒服の男たちと宇宙人が出てくる映画で主人公が最初に渡された銃のように一本の木ぐらい簡単に吹き飛ばすようなものを少しだけ気体していたのだが、どうやら期待はずれようだ。

「ちよつと、完全無視ですか！　さすがにそこまで綺麗にスルーされると傷つくんですけど!!」

「木の後ろに隠れてた怪しい人がいたもんだから」

「エアガンを人に向けて撃たないって常識ですよ、普通」

本当は動物か何かだと思ったのだが、まさか人だとは思っていなかった。叫び声も何かの聞き間違いだと思ったのだがどうやら人が本当にいたようだ。

「にしても何してたの君」

「いやー、別に怪しいことはしてませんヨ!」

「語尾があからさまに怪しくなってるよ」

数回のやり取りをしながら、木の後ろに隠れていた人影は清秋の

目の前まで来ていた。

街灯に照らされ、清秋の視界に映ったのは一人の少女だった。近所の私立中学校の制服を着た彼女は、それだけ見るとただのよくいる女子中学生だ。しかし他の中学生いや、道を歩いているどの人と比べても分かるほどの圧倒的な違いがあった。

「金髪」

「え？」

つい口をついて出てしまう。そう、彼女が他人とは違うもの。それは髪の色だった。さらに眼は青色の瞳、それだけで外国の血を持っていることがわかる。

「その通り！ 私は母さんがイギリス国籍のハーフなの。育ちは日本だからこの通り日本語はぺらぺらだけどね」

ていうか英語はできない、と小さく呟きながら清秋の横に座る。

「それで、君は何してたの？」

「はっ、もしやこれは属に言うナンパというやつですね。これからの予定を聞いて時間があればどこかに連れていく作戦ですか」

「状況から言って確実にあり得ないからね。むしろそっちから話しかけてきたし」

「ダメダメ、ダメですよ。まだ私達初対面ですし、お互いの名前も……。あ、名前を聞いてませんでした」

人の話を全く効かない上に超マイペースでハイペースな子のようにだ。

「僕の名前は葛葉清秋。そこの高校の一年だよ」

「清秋さんですか。私は前まえしまふたば寫二葉ふたばって言います。高校一年ということとは私より三つ上ですね」

三つ下、ということは妹の柚花と同じで中学一年生ということになる。といっても学校が違うので知り合いではないだろう。

「ところで清秋さんはこんなところで何をされていたんですか？」

こちらがもう一度質問する前に先手を打たれた。

しかし質問されたからには答ええないといけないだろう。囿になっ

ていたというのはさすがに言えない。

「夜空の星を見に来ていたんだよ」

適当にふざけてみた。

「クサッ！！ そんな言葉漫画の中でしか聞いたことないですよ」

隣で爆笑された。自分でもなぜそんな事を言ったのか分からない。隣の金髪少女のテンションに影響されたのだろうか。

「でもそんなものを持っているってことは何か訳ありですか？」

「そんなもの？」

二葉の視線を追うと、どうやら自分の手に握られたままのエアガンの事を言っているようだ。

「そんなものってただのエアガンじゃないか。殺傷能力はないよ」すると、二葉はとんでもないというような顔をする。

「もしかして気づいてないんですか？」

「何が？」

「本当に気づいてないみたいです。わかりました、とりあえずあなたの撃ったあの木を見てください」

ベンチの正面にある、先ほど二葉が隠れていた木を指差す。

「特に変わらないけど」

「もっと近くです」

そう言うとき清秋を無理やり立たせて背中を押しながら、木の正面まで連れてくる。そして二葉は自分の背丈より少し高いところを指す。

幹の指で示された部分を良く観察してみる。すると、遠くからは見えないが小さな穴が開いていた。一センチにも満たない、ちょうどエアガンで発射する弾の直径と同じぐらいの大きさの穴である。

しかもその穴はベンチ側から反対側に向かって完全に貫通していた。逆から携帯電話のライトを当ててみると確かに奥まで見通せた。

「どうやらとんでもなく危険なものらしいね」

「そうですよ。私の背がもう少し高ければ脳みそぐちゃぐちゃでした」

「そうだね。でも女子中学生が脳みそぐちゃぐちゃとか言うのやめなさい」

「はい」

それにしてもすごい威力だ。幹に当たった時にほとんど音が無かったところを聞くと、どうやらかなりの高速で貫通したのだろう。人間の頭がい骨は木の幹より固いとは思うが、これほどの威力があれば当たり所によって即死させることも出来るだろう。

もしも引き金を引いたときに銃口が一センチ低かったらと考えると恐ろしくなり、先ほどよりも重くなったように感じるその金属の塊を鞆の中に収める。

「ところで、二葉ちゃんは何をしていたんだい？」

清秋はごまかすように質問をする。

「ちよつと公園で考え事です。今後どうするかについて」

「今後って、まるで家の無い人みたいだね」

「ええ、家出をしてきましたから」

なんでもない風に二葉は言う。

「ちよつと家庭内で色々ありまして、ムカついたので飛び出してきました」

「そんな無茶な。これからどうする気なんだい？」

家出してきたという割には二葉の荷物は学校指定であろう鞆一つである。

「だからそれを考えていたんじゃないですか。財布と通帳はもっているんで少しの間なら大丈夫だと思いますが」

「て言っても泊まるどころか無いんじゃない？　まさかここで野宿とか考えてないよね」

「お、それグッドアイデアですね。漫画喫茶にでも泊まろうと思ってましたがそっちの方が経済的にも負担が少ないです」

目の前の少女はかなり図太い神経をお持ちのようだ。まあそれではなければ拳銃を持った男に話しかけてきたりはしないだろう。

というか友達の家に泊まるとか考えなかったのだろうか。

「でも野宿はさすがに危ないんじゃない。こんなところで女の子が一人なんて」

「いえ、家にいるより数倍マシです」

二葉は俯きがちに言う。

「でも君がいないことに気づいたら親御さんも警察とかに連絡するんじゃない」

「多分そんな事はしないと思いますけどね。この前も一晩帰らなかった事があるんですが、その時は警察どころか気づいてすらいないみたいでしたし」

「どうやら以前も家出をしたことがあるらしい。かなり頻繁に行っているという口ぶりだ。」

「警察ということなら清秋さんの方が帰るべきなのでは。こんな時間に公園でうろついている高校生なんて怪しいですよ。万が一補導でもされたら」

そう言いながら二葉は清秋の鞆を見る。そこには先ほど入れた銃が入っている。確かにこれを見られたらかなりマズイ状態だ。まさか「吸血鬼を探してました」とも言えまい。

しかし中学生の女の子、しかもどうやら今晩は帰らないらしい彼女をこの場において行っても大丈夫だろうか。

「君は今からどうするんだい」

「心配ご無用！ 私こう見えても強いですから。プロの殺し屋でも来ない限り私には勝てません！！」

「感嘆符を点けて堂々ということでは信憑性がここまで下がるものだと思わなかったよ」

しかも手を腰に当てている動作が逆に華奢な体を強調しているように、余計に心配になる。

「まあそれは冗談として、護身術や格闘技はちょっとかじってますから清秋さんよりかは強い自身があります」

頭の後ろを掻きながら照れたような笑いをする二葉。それもあまり信用できないが、家出自体は慣れているようだ。

まあこの辺は治安が悪いわけでもないし周りにあるのは住宅ばかりなので、そこまで危ないということはないだろう。万が一危なくなっても近くの家に飛び込めばいいのだ。

というかよく考えると現在は清秋の方が危険な状態にある。つい先ほど会ったばかりの人の心配などしている暇は本当は無かったはずだ。

「じゃあ僕は帰ろうかな。もし危なくなったら大声で叫ぶんだよ」

「わかりました。声の大きさだけは自身があります！！ 清秋さんこそ襲われないようにしてくださいね。まあもし襲われても私がお嫁にもらってあげます。心配しないでください！！」

その考えに至るのは中学生にしてはどうかと思う。清秋はこの少女の将来の方が心配になった。



「まあプロの殺し屋でも私に勝てるか分かりませんが」

清秋を見送った後、二葉はため息交じりに言った。

「そろそろ出てきたらどうですか。ここにはもう私しかいませんよ」

その言葉を合図にしたように数個の影が現れた。

ある者は街灯の陰から、ある者は草むらの中から、まるで今までそこに存在していたかのように立っている。

暗さの所為か彼とも彼女とも彼女ともつかないそれは五人、二葉を取り囲

むように立っている。

「ち、ちを」

ふいにそのうちの一人が呟いた。ちょうど二葉の正面、木の陰から現れた一人である。

「毎度毎度面倒ですね。少しはその脳を使って考える事はしないんですか。ただ本能の赴くままに血を求める」

じりじりと近寄ってくる影に対して逃げるでもなくむしろ挑発する。

といっても挑発などしても意味がない。彼らは脳で考えるのではなく体が、より正確に言うとは血が体を動かしている。そのため、通常の人間が脳で考え電気信号として筋肉に命令を出すというわずかなタイムロスをなくす事が出来る。

二葉にはよくわからないがこの生物はそういう仕組みになっているらしい。

「血をよこせ！」

次は明確な声で叫び、直後に五方向から全員が飛びかってくる。

「まあ普通じゃないのはあなたたちだけではないのですよ」

そう言うとは前方から突き出された手を掴む。飛び込んできた勢いに少しの力を加えることで運動方向を調節し、右後ろから来た者に向かって投げる。

さらにしゃがみ込んで左の二人の足を払い、右から来た者の胸に向かって肘を突き出す。胸骨の隙間に肘が食い込んだのを感じ、直ぐに嫌な音を聞いたがすでにこれも慣れてしまった。

数秒後には完全に足の骨を折られた状態でその五人は二葉の周りに倒れていた。

「御苦労さまでした。それでは私は後処理をして帰りますかね。どうせその傷もすぐに治ってしまうんでしょう？」

「その必要はないわ」

突然声が聞こえた。

もちろん倒れている者が喋ったわけではなく先ほどまでここにいなかった別の者の声である。その声はちょうど二葉の真後ろからであった。

「一人で五人も処理するのはたいへんでしょ？ 私がやっといてあげるからあなたは帰りなさい」

言葉はだけ聞くと親切なセリフだが何とも言えない気持ち悪さがある。たまたまそう聞こえてしまっただけでもっと酷い言葉を放ったのではないかと思えるほどの不快感があった。

二葉は急いで振り向きその女の顔を確認する。

体が触れ合うほど近くにいたせいもあって、二葉はひと回り背が高いその女の顔を見るために嫌でも斜め上を見ることになった。

そこにいたのは金髪、青い眼の女。髪は腰まであるストレート、口元の左端を上げニヤニヤしながら二葉を見降ろしている。

その顔に二葉は見覚えがあった。忘れられない顔。生まれた時からずっと見ていたその彼女の顔を見て二葉は一言つぶやいた。

「お姉……ちゃん？」

第八話…訪問者

家に家帰った清秋は玄関に見覚えのない革靴が並んでいる事に気づく。腕時計を確認すると、時刻は九時過ぎ。こんな時間に誰が来ているのだろうか。

「遅かったじゃない」

清秋がただいまと言う前に妹がリビングから出てきた。見たところあまりご機嫌がよろしくないようだ。

「ただいま。誰かお客さん？」

「そうよ、兄さんに。もう息苦しいわ。刑事さんが二人も」

後半は中にいる客人に聞こえないよう小さな声で言った。刑事が一体自分に何の用だろうと思ったが、とりあえずリビングで待っているようなので清秋は靴を脱いで向かった。

リビングの中に入ると、二人の男がソファに腰かけていた。一人はグレー、もう一人は黒にストライプのスーツを着ている。

「どうも、葛葉清秋君だね。すみませんが少し待たせてもらったよ。私、山口悟というものだ」

五十代ぐらいだろうか、少し白髪交じりのいかにも刑事といった感じの男がソファから立ち上がり、警察手帳を開きながら清秋に挨拶をする。すると、その横に座っていた黒いスーツを着た、まだ若い刑事が山口と同じように手帳を開いて名乗った。名前は杉山浩太と言うらしい。

再びソファに座り直し、清秋が腰を下ろしたのを確認すると山口は口を開いた。

「今日は葛葉君……おっと、清秋くんと言わないとややこしいな」
柚花の方をちらりと見ると山口は続けた。

「清秋君に聞きたいことがあってね。一応前島先生にも 名刺と一緒に伝えておいたんだが」

そこで清秋は思い出す。

確かに病院で起きたときにあの医師から名刺を渡された。あのあの出来事が衝撃的すぎて、そんなことなど記憶の底に埋もれてしまっていた。

「すみません。すっかりわすれてました」

「いやいや君も大変だっただろうからね特に気にしていないよ」

山田は人の良さそうな笑顔を見せると一呼吸置いてから話を始めた。

「君もわかっていると思うが、聞きたいことというのは一昨日のことだ」

『一昨日のこと』というと、もちろん吸血鬼もどきに襲われたことだろう。

刑事が来ているという時点でそのことを聞かれるのは予測できていたし、近々こういったことが起こるだろうとも思っていた。

「あの時は突然後ろから殴られて気を失ったのであまり覚えてません」

だから清秋は用意していた一文を読み上げる。

血の塊が動いていたなどということを経験するだろうか。そんなことを言えば笑い飛ばされるのが目に見えているし、ましてや目の前に座ってこちらを見ているのは刑事である。

一見人のよさそうな笑顔を作っているが、こちらが話しやすいように作り出している表情かもしれない。

常識を逸するような発言をして再び病院に連れていかれたりするのはごめんだ。

「そうか、それなら仕方が無いな。じゃあ君が気を失う前に見た遺体について教えてもらえるかな？」

さすが刑事といったところだろうか質問に遠慮がない。

もちろん清秋が唯一の目撃者なのだろうが一方でただ高校生だ。

人によっては精神的な傷を負っていることも考えられるだろう

「あまり思い出したくないんですが」

といっても死体がグロテスクすぎたからというわけではない。た

だ、そのあとの出来事の常軌を逸していたため『死体があった』という事実が掻き消されただけである。

「思い出せる範囲でいいんだ。どんな些細な事でも構わない」

山田の言葉に対して清秋は少し考えたあと一言答えた。

「たしか、首が大きく切られていて、血が溢れていました」

「ということは、死体からはまだ血が流れていたんだね？」

「流れていたんだねかはわかりませんが、周りに血だまりができるぐらいには出血してみたいですね。人が出血してるところなんて始めて見ましたが、血ってあんなに入ってるものなんですね」

辺りに飛び散った血液、まるでそこだけ血の雨が降ったような光景を思い出す。不思議とその時感じた気分の悪さは感じられず、むしろその時の異常な出来事を人に話したいという興奮の方が大きかった。

「わかった。もういいよ」

山田は清秋がまるで映画の一場面を話しているような口ぶりで説明することに、多少驚いた様子を見せたが、すぐに質問を続ける。

「ということはそのときはまだ血液がのこっていたんだね？」

「まだ？」

「ああ、いや。君には言っておいてもいいかな。君が目撃した死体なんだが」

すると山田は少し言葉につまり、言いにくそうにする。

「血液が全部なくなっていたんだよ。しかも血液だけじゃなく、体の中の水分がすべてなくなっていたんだ。まるでポンプでも使って無理やり吸い出したみたいだね」

「そんなこと誰が何のためにするんですか？」

「わからない。ただ、誰がしたかという点では君を後ろから襲ったという人物が怪しいね。なぜ君を殺さなかったのかとか血液を抜き取ったのかは分からないが」

血液を全部抜きとられると聞いて清秋の頭の中で一つの単語が浮かぶ。

『吸血鬼』

人の生き血を吸って生きる闇の生物。

しかし出魅の話ではあの血の塊が吸血鬼のようなもので、襲われる方ではないはずだ。それとも寄生虫のように養分を吸ったら別の人に寄生するような類のものなのだろうか。

「まあそういうことだから殺人の犯人がこの辺をうろついているかもしれない。くれぐれも気を付けるようにね」

そう言うと山田はソファから立ち上がり玄関の方に向かう。

どうやら清秋に事件当時の様子を詳しく聞きたかったようだが、本人がほとんど覚えておらず役に立たないと思ったのか早々に立ち去ることにしたようだ。

そんな刑事二人の後ろを追い慎一は玄関まで見送る。

「ああ、それから」

と、玄関で靴を履きながら山田が顔だけをこちらに向ける。

「清水出魅という女が来なかったかい？」

「!？」

つい数時間前に聞いた名前を聞いて清秋は少し動揺する。

ただ、それを顔に出す事はなかった。いや、出さなかったと言った方が正しいだろう。

さきほど、リビングでの会話の時とは一転して刑事の顔には何やら威圧感のようなものが感じられた。「なんらかの関わりがあるなら今すぐ連行する」とでも言っているようだ。

清秋が自然と動揺を隠してしまったのもそういった山口の表情の所為だろう。

「名前を聞いたことがないならいいんだ」

しばらく黙っているとすぐに顔の筋肉が緩み、人のよさそうな表情を作る。

「ただ、もしも清水出魅が接触してきてもあまり関わらない方がいい」

「その清水出魅という人物は犯罪者か何かなんでしょうか？」

もしもここで出魅が犯罪者、もしくはそれに準ずる何かだという答えが返ってきたら明日からあの女と関わるのはやめよう。むしろここで告白して刑事を彼女のところに連れて行ってもいいかもしれない。

しかし山口の口から『出魅は犯罪者』という言葉は出なかった。

「いや、そういう事ではないのだが……、なんというかその女に関わるとうるくな事がないからな。学生生活を平凡に終わりたいと考えるなら関わらない方がいい人物だ」

「わかりました。心の隅にでも留めておきます」

清秋が答えると刑事は本当に用事が終わったのか「失礼するよ」といって玄関のドアを後ろ手に閉めて出て行った。

「ふう……」

一呼吸着く。

ただでさえ疲れていたのに帰ってそうそうに刑事に尋問をされるとはついていない。

しかもあの杉山と言う刑事。一言も話していなかったが清秋から一度も目を離さなかった。まるで人の形をした監視カメラのように清秋と山口が話している間中、ずっと清秋を見つめながらメモを取るだけであった。

刑事からの尋問よりもそちらの視線の方が清秋の精神を弱らせていた。

「二度とこんなことはご免だな」

それに出魅についてである。

山口は「ろくな事が無い」と言っていたが、清秋はすでに『ろくな事が無い』状況にある。これが出魅によるものであるのかは別として、少なくとも彼女は過去にもなにやら刑事がらみの事件に関わっているらしい。

その辺を明日聞いてみなければいけないだろう。今日はあの女と言われるがままに動いてしまったが、自分は彼女の事を全くと言っていいほど知らなさすぎる。

「兄さん、いつまでそんなところでいるの？」

と、後ろから柚花の声がかかる。

考え始めると周りが見えなくなるのは悪い癖だ。気付けばまだ玄関に突っ立ったままであった。

「とりあえずご飯たべちゃってよ。片付かないから」

「ああスマン。すぐ食べる」

出魅の事は後で考える事にして、清秋は空腹を満たすためにキツチンへ向かった。



公園はまるでこの世界の生物がすべていなくなってしまったのではないかと思えるほど静まり返っていた。

「お姉……ちゃん？」

その静寂の中で小さな声が響く。まるで一息で消えてしまうほどの小さな蠟燭をつけているような弱々しい声。しかし、少女の声は相手に届いたようだ。

「ごめんなさい。あなたのことは『記憶にしか』ないわ」

こちらは一転して鋭い声。まるで氷で作った刃物のような冷たく鋭いその声は闇を切り裂いて先ほど疑問を投げかけた少女、前寫二葉に放たれる。

その女はその長い金髪を夜風に揺らしている。

「ええ、そうよ。私の名前は前まえ寫一葉。あなたの姉よ」

「うそ……、だってそんなはずない」

二葉はうろたえる。

確かに前の前に立っているのは自分の姉だ。二葉と同じ金色の髪に青い瞳、その整った顔立ちも澄んだ声もすべてが二葉の知っている一葉そのものだった。

しかし、自分の姉がここに立っているはずが無かった。なぜなら「お姉ちゃんは死んだはずよ」

そうだ、一葉は数年前に”不幸な事故”によって死亡したはずである。その事故の所為で二葉は父とほとんど口を利かなくなったのだし家出なんかもしているのだ。

「生き返ったのよ。だから私はあなたが前寫二葉という名前で私の妹だっこともしってるわ。でもね、私が持っているのはあなたの記憶だけ」

「どうということ？」

「別に私はあなたと長話をしに来たわけじゃないわ。この『死体たち』の回収にきただけ。どうせあなた一人じゃこれだけの量を処分できないだろうし、再利用も出来なくなっちゃうじゃない」

言いながら一葉は辺りに散らばったまだもぞもぞと動いている『死体たち』をまるでクッションでも片づけるかのように軽々と片手で持ち上げ、自らの肩に担いでゆく。

そして四人目を持ち上げ右肩に二人、左肩に二人を乗せたところで最後の一人の腹を蹴り飛ばした。死体はいとも簡単に孤を描いて宙を舞い、二葉の足元に落ちる。

「一つだけ置いて行ってあげるわ。あなたもそろそろ衝動を抑えきれなくなってるんじゃない？」

「そんなこと!!」

「じゃあね。また機会があったら会えるかもしれないわ」

二葉のセリフが言い終わらない内に一葉は馬鹿にしたような笑みを浮かべながら暗闇の中に姿を消した。

残されたのは二葉と一体の死体。

「うう、う、ヴヴ……」

足元で唸っている死体はいまだに二葉を襲おうとする。

全身の骨を折られているためあまり動けないが、あと数時間もすれば完全に再生してしまうだろう。

このまま放置していけば襲われるのは運悪く通り過ぎた一般の人。それが子供か大人か、女か男か分からないがその運の悪い人の生死は今の二葉の行動にかかっている。

普通ならこの死体は前身の骨が無くなろうが、頭を撃ち抜かれようが再生する。しかし完全に機能停止にする方法が無い訳ではない。この死体を動かしているのは血液である。つまり体中の血液を一滴の凝らず吸い出してしまえばこの死体は『ただの死体』に戻ってしまうのだ。

「くっ……!」

小さく悪態をつく。

放置しておけば人を襲う。そしてそれを阻止できるのは二葉しかない。

一葉はそれを見越してこの死体を放っておいたのだろう。

それを二葉に処分させるために。

それを二葉に喰らわせるために

夜の公園に骨の碎ける音と繊維の引きちぎれる音、そしてそれを喰らう咀嚼音そしゃくおんが響き、暗闇に消えていった。

第九話…一般人

昼休みの食堂。周りは授業が終わってやっと一息ついた生徒でごった返している。

今日も慎一は食堂で昼食をとることになった。

別にいつも教室でいつも一緒に食事をしている弘樹が休んでいるとか喧嘩をしたとか言う訳ではない。いつも通り清秋は食堂で弁当なりパンなりを購入して教室に帰る予定だったのだ。

それがどうしてこうなったのか？

「清秋くんは『夏みかんゼリー』を振る人？ 振らない人？」

「そもそもその缶飲料は振ってから空けるものでしょう？」

注文したカレーを胃袋に収め終わった清秋の目の前には清水出美が清涼飲料水の入った缶を両手で覆うように持ちながら、当然の様に清秋と会話をしていた。

今日も今日とて四限が終わると同時に教室から飛び出して食堂に滑り込んだ清秋は食券売り場の前に一人で立っている出美を発見したのだ。

さすがに挨拶もなしに通り過ぎるのもどうかと思い、軽く声を掛けてから通り過ぎるつもりだった。しかし「一緒に食べていきましよう」という彼女の一言によって清秋の昼休みの予定は食堂で過ごすことに変更された。弘樹には一応連絡しておいたが二日連続で昼食を一人にしているので少し申し訳ない。

「でも『よく振ってから開けてください』って書かれてると反抗してそのまま開けたくならない？」

「どんだけあまのじゃくなんですか。ていうか振らないと出てこないじゃないですかそれ」

「そうなの？ 私初めて買ったから知らなかったわ」

「……」

にっこりと微笑む出美。その表情だと清秋をからかっているのか天

然なのかわからない。

「それで、昨日はドッペルゲンガー見つけれなかったけどさ……」
食事をしながら会話をしていると、どうやら出美は昨日の六時以降の事を覚えていないようだった。

しかもそれだけでなく、その後はそのまま家に帰って寝るまでの記憶があるらしい。といっても細々とした事は曖昧で、例えば昨日の夕食についてなどは記憶してなかった。

本人はそういったことを不自然に思っていないらしく「記憶力落ちたなー」などと言って笑っていた。しかし毎日夕食の記憶が無いというのは気にならないのだろうか。

「ちょっと聞いているの？」

「え？ ああ、すみません」

どうやらまた考え込んでいたようだ。気付くと出美はテーブルに乗り出して清秋との距離を詰めている。ほんのりとシャンプーか香水が分らないが甘いにおいがした。

「だから、最近気になる事件があるんだってば」

「事件？」

「そうなの。私、知り合いに仲のいい刑事さんがいるんだけど」

出美は再び座り直す。

「この街で突然いなくなる人が増えてるんだって」

「いなくなるって行方不明でことですか？」

「そうなの。ここ最近で数十人になるんだって」

数十人も人がいなくなると新聞に出ていてもおかしくない数だろう。しかし清秋はそういったニュースを見た覚えはないし、噂でも聞いた事がない。

その旨を言うと出美は得意顔になる。

「だから刑事さんから聞いた事件なんだって。行方不明って言うてもホームレスの人たちらしくてね、ここら辺の公園で住んでる人がいなくなるんだって。警察の人は場所を移ったんだろうって事にしてるらしいけど、これは絶対に何かあるよね」

「確かに変わった話ですね。でも住所の登録とかしてないから確かめようもないでしょう。もっといいところが見つかってみんなでそこに移住したのかもしれないし」

「警察の人はホームレスの人がいなくなって正直ホッとしてるだけなのよ、公園を不法占拠してる人たちだしね。それに移住したにしてもおかしい点があるのよ」

出美はよく振った缶のプルタブを起こして中のゼリーを一口食べてから続ける。

「普通、移動したなら『家』も持っていくでしょ？ でもいなくなった人が住んでたところには段ボールもシートも残ってたの」

「あとから調達するって言う考えは？」

「それも考えられるけど、もうひとつおかしい事があってね。いなくなってるのはすべての公園から数人ずつ。って言ってもそんな人達がいる場所自体が少ないんだけど、まるで出来るだけ目立たないようにするみたいに少しずつ減ってるのよ」

そう言うとき出美はポケットから小さな地図を取り出した。

パソコンで印刷したらしい地図に、赤いペンで丸印をつけてある横に書いてある数字はいなくなった人数だろうか、確かにすべてが均等にいらなくなっているようだ。

それにしてもこれは出美が一人で調べたのだろうか。いや、中のいい刑事がいると聞いていたのでその人物に聞いたのだろう。というか刑事がこんなに情報を漏らしていいのだろうか、清秋は顔も見つけないその刑事の事を心配する。

「思ったよりこの街って公園があっただけですね……あっ」

「どうかしたの？」

清秋が目についたのは一つの丸を付けられた公園。紀近高校から最も近くにある白桃公園である。

そこにも赤いペンで丸を付けられており、横に数字で『1』と書いてある。

「白桃公園？ あっ、そう言えば今日の新聞に変死体が見つかった

って書いてあったわね。やっぱりこれだけ近いと怖くなってくるわ」
清秋の視線の先を追ったのか出美は地図上の白桃公園を指で指し、
続けて公園のある方角に顔を向ける。

「どうやら出美は昨日清秋がその事件に関わっている事を知らないらしい。というのもあたりまえだろう。普通目撃者の名前まではニュースにも出ない。」

「それにしてもこれは調べがいがありそうね」

「え？」

嫌な予感がする。何か昨日も同じような事があったような。確かこの流れだと

「これは絶対に宇宙人の仕業よ。足がつかないように少しずつかつホームレスを選んで連れ去ったのよ。まさかこの日本で大量アブダクションが起きてるなんて……。と言う事は第一種、いえ第二種接近遭遇ぐらいは起きてるかもしれないわ。あ、でもこれまで大きい事件だとMIBが動き出してる可能性も否めないわね。となると警察が動かないのも納得できる。記憶は全部諜報部に奪われたのよ」
「どうやら出美のオカルトスイッチがオンになってしまったようだ。というかもうオカルトマニアとか言うよりもただの電波な発言にしか聞こえない。」

「出美さん、ちょっと落ち着いてください」

「落ち着いてなんかいられないわ。こうしてる間にもUFOが屋上に飛来して生徒を秘密裏に連れ去ってるかもしれない。ちょっと確かめてくる」

「そう言い残して止めるひまもなく出美は食堂から飛び出して行った。」

しかしあれだけぶっ飛んだ発言をボリュームマックスで喋り散らして、どうして『才色兼備なお嬢様』で通ってるのだろうか。

普段はもっと普通なのか、彼女とほとんど話した事が無い人の噂か、と言っても清秋も一人からしかそう言った話を聞いていないのだが。

「このところ部長の方が活発化しているので昼の顔であるの出美さんが不安定になっているものだと思います」

「うわ！　どこから現れた」

「どこと言われましても、ただ昼食を摂ろうとしたところ清秋さんが見られたので同席させてもらおうかと」

清秋の正面、先ほど出美が座っていた場所にはさも当然のように雀が腰かけ、無感情な目をこちらに向けている。

それにしても昼休みを半分以上過ぎた今頃になって昼食とは、いままで何をしていたのだろう。まあ別に清秋とは関係のないことだが。

「というか年下に後輩に向かって敬語なんて使わなくてもいいんじゃないですか？」

「後輩？　誰の事を言ってるんですか？」

右目の片眼鏡をいじりながら疑問を質問で返してくる。

「え、だって雀さんは二年生でしょう？」

「そんな事を言った覚えはありませんけど」

一瞬の沈黙が流れる。そして清秋の視線は足元、正確に言うとな雀の履いているスリッパに向かった。

ちなみにこの学校では学年ごとにスリッパが色分けされており、清秋達一年生は赤、二年生が緑、三年生が青となっている。

そしての視線がとらえたのは赤色、真正正銘一年生を表す色である。普段ならスリッパの色で確認をするのだが、初対面の場所と状況が特殊過ぎたのと出魅と接する時の立ち振る舞いからすっかり年上だと勘違いしていたようだ。

「てことは同い年！？」

「私が留年なんかしてるように見えますか？」

「なんだ、じゃあ敬語とか使わなくてよかったのか」

相手が同学年だと分かり力が抜ける。あまり年上のしかもお世辞にも愛想がいいと言えない人と話しているとどうしても肩に力が入ってしまうのだ。

「その結論はいささかおかしいのでは。敬語とはそもそも相手に敬意を持つているから使うのであって年齢とそう言った事とは関係ないはずです」

「う、確かに」

無表情で淡々と言われるとなんとなく怒られているような申し訳ないような気持ちになってくる。しかも言っていることが最もすぎて反論のしようもない。

「つまり清秋さんが私に敬意を持っているなら敬語を使うべきであって、先ほどの発言だと私に敬意なんか払うべきではなかったと言っているように聞こえました」

「いや、だからそう言う訳ではなくて……」

「ちなみに私が普段敬語を使うのは他人に対しては常に敬意を払っているからであって」

目の前のノンストップトークングマシンをどうやって黙らせればいいのか。先ほどの出美というのとはみなこんな風に話したすと止まらないものなのだろうか。ああ、だから世のお母さんたちは買い物に数倍の時間を掛けるんだなと清秋は半ば現実逃避しかける。しかし、いつまでもそうしている訳にはいかない。

「だから!!」

バンツとテーブルを叩いて雀の話を無理やり中断させる。相手は予想だにしていなかったらしく、目を見開き……はしなかったものの、無表情ながら少し驚いたような雰囲気を出して言葉を止めた。

清秋の大声とテーブルを叩く音に引き寄せられ、周りで食事をしていた生徒は「どうしたのだろう」と不審な目を向けてきたが清秋は気にしなかった。

「友達だから敬語なんか使わなくてもいいだろ」

「友達？」

雀はごく微小だが顔を傾けて疑問を示す。

「そう、一緒に昼食を食べてる。それでもう友達だ。友達どうして敬語なんて使ってたらよそよそしいし」

「……」

「わかったな」

「わかりました」

と言いながらも敬語は雀から清秋に対する敬語は取れていない。癖のようなもののなのだろう、無理して使っていないようなのでその点には触れないことにした。

それにしても先ほどまでの勢いはどこへ行ったのか、雀は完全に黙ってしまいいしゅんとしている。少し強引に言いすぎただろうか。

「ああ、ちよつと強く言いすぎたかな。でもアンタが全然聞く耳持たなさそうだったか……」

「出美さんには」

「え？」

「出美さんにはなぜ敬語を使うんですか？ 彼女も『友達』ならばそういったものは必要ないのではないかと」

少し黙った時間は脳内で処理をしていただけだったようだ。どうやら彼女は物事を論理的に考えるようで、少しでも矛盾点があると気になる性格らしい。

なんとか雀を言いくるめた時にすっかり皿も空になっていった。

といっても清秋は雀が来る前に食べ終わっていたので、空になったのは雀の皿である。

「ところで清秋さん」

箸をトレイの上に揃えて一言発する。

「な、なんでしよう雀さん」

また何か先ほどの会話の穴でも見つけたのだろうかと思いきくビクビクしながら答える。

しかし清秋の予想は外れたらしく「雀でいいです」という一言の後「ところで」と話題転換の接続詞を持ってきた。

「出美さんにはあまり危ない事をさせないようにしてください」

「危ない事？」

なにか危ない事をさせただろうか。清秋は記憶の糸を手繰るが心当たりがない。強いて言うなら先ほど一人で走り去っていくのを放置したことだろうか。

「あの人は部長と違って特殊な力がある訳ではないので、そんな彼女が私達の世界に首を突っ込むなど危険すぎるのですよ」

「出美さんにはそういった力はないの？」

「いえ、正確に言うと思えないんです。潜在的には持っているのですがそれを発現できないと言ったほうが正しいですね」

あくまで人間離れた力を使えるのは午後六時以降だけで、日中はただの女子高生ということらしい。

「だから万が一巻き込まれた場合対抗する手段がないのです」

「それを言うなら雀も一緒なんじゃないか？」

名前を呼び捨てにするのはなんとなく抵抗があったが、ここで「佐々木さん」などと言えばまた突っ込まれるかもしれないなどと考
えながらも清秋は質問する。

「私にはこの眼があります」

そう言うと雀は自分の片眼鏡を指した。

オーバーシーイング

「『過剰視界』それが私の能力。と言っても自分自身で制御できないので片眼鏡これに頼っているんですが」

片眼鏡の横に付いているダイヤルを指先でなでる。どうやら何かを調節するためのものらしい。

「とりあえず彼女が危ない事に首を突っ込まないように見張っておいてください。例えば最近多発している失踪事件の現場を見に行くなどと言った事は絶対にしないように」

「……」

「今「どうせ無理やりつれていかれるだろう」と思っていましたね」
「いや、そんなことはないよ」

凶星だ。放課後になればおそらく出美が無理やり清秋を引っ張っ

ていくに決まっている。それにあの人にはどうも抵抗できない。力とかそういうものではなくて、無邪気すぎる。まるで虫とりにも行く少年のような無邪気さで誘ってくるものだから何とも抵抗しづらいのだ。

「とにかく、絶対に阻止してくださいね」

「わかったわかった。出来る限り止めてみるよ。とりあえず、もう次の授業始まるから」

言うと同時に予鈴が響いた。ここは無理やりにも会話を終わらせないと授業をさぼる羽目になりそうだ。

清秋は席を立ち、食器を片づけて急いで教室に戻る事にした。教室があるのは同じフロアなのだから雀と一緒に帰ってもよかったのだが、またぐだぐだと話が続きそうだと思い誘うのを思いとどまる。

「ではまた、午後六時に部室でお待ちしております」

雀も一緒に帰るつもりはないらしく食器を片づけながら挨拶をした。

どうやら今日もあの部屋に行かないといけならしい。気分が一割増しぐらい沈んだところで清秋は「じゃあ」とだけ言って食堂を後にした。

第十話：捜査開始

ホームルームが終わり、早々に家へ帰ろうとした清秋が教室のドアに向かうと、そこにはすでに清水出美が待ち構えていた。

「帰しませんよ清秋くん」

人差し指を立てて、まるで本格ミステリにでも登場する探偵のよきな口調。それが何となく出魅と重なるところがあったが、その悪戯っぽい笑みは夜の勝ち誇ったような顔とは違った。

先に帰れば諦めてくれるだろうかと思ったのだが先手を打たれたようだ。といっても本人にそんな気はないのかもしれないが。

「それで、今から何をしようって言うんですか」

ドアの前で突っ立っていると教室から出てくるクラスメイトが邪魔そうな視線を向けてきたので階段前の少し開けたところに移動しながら出美に聞く。

「そんなの調査に決まってるでしょ」

「って言ってもその事件……というか人が消えた公園を全部回るんですか？」

「本当ならそうしたいんだけど、そんなに時間もないしね。とりあえず回れるだけ回しましょう」

鞆の外ポケットから昼休み食堂で出した地図を取り出す出美。

そう言えば飛び出して行った後どうなったのだろう。屋上で未確認飛行物体との遭遇には成功したのだろうか。いや、そんな未知との遭遇を成し遂げていたらこんなところに平然と存在していないだろうが。

「ここから一番近いのは……、やっぱり白桃公園ね。ここなら歩いてもいける距離だし」

「やっぱり行くんですね」

「何よ。あまり行きたくないような言い方ね。確かに一昨日に変死体が見つかったって聞いたらちょっと怖いかもしれないけど」

「実はその変死体の目撃者なんです」とも言えない。一応雀から出美にはそう言った事に関わらないように言われているので不用意に情報を与えない方が良さだろう。

それに彼女からの質問攻めに遭うのは目に見えている。

「まあとりあえず行ってみましょう。ところで……」

階段に向かって歩き出した出美は清秋を一瞥する。その視線の温度が少し低いような気がしたので、自分が隠し事をしているのがバレてしまったのかと少しひやりとした。

「今日の昼休みの食堂で私が出て行った時に一瞬見えただけ、スズちゃんと何の話してたの？」

「え？」

あまりに唐突な質問だったので清秋は一瞬何の事かわからなかった。

「ほら、あの片眼鏡の女の子よ。私が出ていく時にちょうどあなたの前に座った」

と言われると雀の事を言っているのは明白だ。どうやら『すずめ』の頭二文字を取って『スズちゃん』らしい。

あの時は脇目もふらずに出て行ったのだと思ったが、きっちり確認されていたようだ。テンションが上がっているだけで周りが見えなくなる程ではないらしい。

「ああ、たまたま座ったので一緒に食べてただけです」

「あなた達知り合いだったのね。仲良さそうだったし」

「良さそうでしたか？ 会話という会話をしたのは今日が初めてみたいなものなんですけど。ていうか出美さんはそのまま出て行きましたよね」

「い、いえ。たまたま帰ってきたら二人で楽しそうに話してたから。あ、私の靴箱こっちだわ」

いつの間にか下足に到着していた。一年生と二年生の靴箱は別列になっているので一旦出美と別れる。

それにしても雀との関係をどう説明したものか。

もちろん正直にありのままを話すのはNGだ。

クラスメート？ いや、彼女とは違うクラスだしここで嘘をついてもいつかぼろが出たに面倒だ。

幼なじみ？ 彼女と出美は友人同士らしいからその説明もすぐばれるだろう。というか話した事はあまりないと言ってしまったところだ。

朝の登校時間にたまたまぶつかって……。ベタ過ぎる。

考えながらも靴箱から自分のスニーカーを出して上履き用のスリッパと履き換える。そしてそのまま靴箱の列を抜けると出美も同じように出てくるところだった。

「雀と出美さんって友達なんですか？」

上手い言い訳を思いつけなかった清秋は、出美が話しだす前に質問した。意表を突くような質問に出美は少し硬直したが、「呼び捨てで呼ぶような仲なんだ」とぼそぼそ言った後に、

「スズちゃんとはあまり喋らないんだけどあの子のお姉さん、って言っても双子なんだけど。あの子の姉さんと私の仲が良いからその繋がりだね」

「双子っていうとやっぱりそっくりなんですか？」

「見た目だけで言えばまったく同じね。ただ雰囲気とか性格は正反對な双子だから会ったらすぐわかるわ。今日も遠目に見て分かったぐらいだしね」

あの無表情少女と同じ顔で表情豊かに話す様など想像できないな
と思いながら校門までやってくる。

下校時間だけあって生徒も多く、今から遊びに行くであろう者たちがわいわいと通り過ぎる。

そんな中自分は上級生の女性に連れられて近くの公園へ。

それだけ聞くと一般的な男子高校生なら胸をときめかせるような青春シチュエーションだが、生憎相手はオカルトマニアな二重人格である。さらに公園へ行く目的は失踪事件の捜査という全く青春色のない素敵イベントなのだから、楽しそうな日常を過ごす生徒達に

恨みの視線の一つや二つぶつけたくなる。

しかしどうやら出美には違うように取られたようだ。

「あら、こんなに綺麗な先輩がとなりにいるのに他の子が気になる？」

「いえ、そんなことは」

「ふふ、冗談よ。さあ行きましょうか」

やはり目的は違えど他の女の子を見ていた事に少し怒っているのだろうか、出美はそう言うときさっさと先に歩きだしてしまった。



「やっぱりダメみたいですね」

白桃公園に到着した清秋と出美の前には『立入禁止』の札がかけられたロープが張り巡らされていた。

とりあえず遺体が発見された場所まで行こうという出美の提案により雑木林の中に来たのだが、捜査開始にして早くも出鼻を挫かれた――

「どうしたの清秋くん。早く来なさいよ」

ということにもならず、すでに出美は遠慮なく禁止区域に侵入していた。

「一応言っておきますけど、ここ立入禁止ですからね」

「そんなの分かってるわよ。でも禁止って言われることほどしたくなるのが学生時代じゃない？」

「少なくとも僕にはまだそんな時代が来てないです」

どうやら目の前の出美という人物の時代には永遠に追いつけそうにないなと考えながら清秋はロープをまたいで禁止区域に入っている。

く。

周りに生えている草木は一昨日来た時と同じ、というかどこに行っても同じような光景が広がっているのも同じとしか言いようがない。

一昨日は気付かなかったがなるほど、ちらほらとビニールシートや段ボールといった『家』らしきものが点在しているのが確認できた。あの時見た死体もこの中のどこかに住んでいた一人なのだろうか。

「草と木しかないわね。これじゃあ手がかりがあっても見つけにくいわ」

「手がかりって……。先輩は何を求めてるんですか」

「そりゃあ宇宙人の足跡とかミステリーサークルとか、あとはオーパーツなんかがあれば万々歳ね」

「でもそれを探すならもつとゆっくり歩いた方がよくないですか？」

「ほとんど木々の中に入っていく出美。彼女が探しているものからして草むらをかき分けながら探す類のものだろう。」

「といってもそんなものが見つからないのは知っているのでわざわざそんな疲れる仕事をしたいわけではないのだが。」

「この奥に死体が見つかったところがあるらしいのよ。とりあえずそこまで行ってからさがすわ」

「あるらしいって、誰に聞いたんですか？」

「知り合いの――」

「刑事さんですね」

「そうよ」と言っただけに奥に進んでいく。

どうやらその刑事のおかげで清秋はこんな草むらに入って宇宙人の痕跡を探すという重労働を強いられることになったようだ。しかも見つからないと分かっている物を探すものだから余計に気分が落ち込む。

こんな事になった原因の顔も知らない刑事に心の中で呪いの言葉を呟きながら出美の後を追った。

少し行ったところで出美が立ち止まる。どうやら目的地に着いたようだ。

「ここよ」

と、本人の確認も取れたところで清秋は改めて周りを見回す。

確かに一昨日清秋が遺体を見たところのようだ。伸び放題の雑草と周りに生えた木々、確か出美のとなりにある木の陰に例の遺体があったはずだ。

もちろん今はそんなものがあるはずもなく、周りに飛び散った血の痕さえも無くなっていた。

「それにしても何もないわね。死体があったっていうからドラマみたいに白い線で人型に書かれたアレがあるのかと思ったんだけど」

「事件が起こったっぽいものは立入禁止の札だけでしたね」

「つまらないわね。もっとうこう、秘密組織が調査してるところを思い浮かべたのに」

この人の想像力は無限大らしい。

しかし、言われてみれば本当に何もない。一昨日の事だといっても札一つしか置いていないし、見張りの一人もいない。まるでどうぞ入ってきてくださいとでも言っているようだ。

「まあ警察はそんなに重要な事件だと思ってないんじゃないか……」

「どうしたの？」

突然言葉を切った清秋にキョトンとしてする。

「今、何か聞こえませんでしたか？」

「え？ 何も聞こえないけど」

ザザザッ、という草をかき分けるような音。それも遠くからこちらに近づいてくる。

「まさか……、チュパカブラー!!」

「ちょっと黙っていてください!!」

本人は本気なのだろうが清秋からしたらふざけているとしか思えないような彼女の発言に正直イラッとしたのでつい怒鳴りつけてしまう。

一旦出美の事は放っておいて、そのまま耳をそばだてる。確かに何かがいるようだ。それもかなり速い速度で。

眼を閉じて、聞き耳を立てながらその音がする方向へ近づいて行く。そして一本の大きな木の陰を過ぎて枝を避けるために少しがんだところで……

ゴツンッ、と頭に衝撃が走る。

「ぐあっ!!」

「ギャー」

前者は清秋、後者は謎の生命体である。

頭に受けた衝撃から、恐らく相手も頭をぶつけたのだろう。向かに転がっていたのはもちろん宇宙人でもチュパカブラでもなく、まごう事なき人間であった。

それもツインテールの金髪で青い眼。見た目からして外国人の小さな少女……

「って二葉ちゃんじゃないか！」

「清秋さんじゃないですか!!」

予想外の遭遇に二人とも驚きを隠せず、立ち上がることもせずに叫んだ二人の声は雑木林の中に響いた。

第十一話：草むらに咲く赤い花

「というわけなんです」

「『しばらく時間が経ってその間に説明した』みたいに言っても誤魔化せてないからね！　ていうかまだ立ち上がってもいけないし」

頭をさすりながら清秋はゆっくりと立ち上がる。あれだけの勢いでぶつかった割にはこぶ一つですんだのは幸いと言ったところだろう。見たところぶつかった相手側も外傷はないようだ。

「フフ、説明なんかしなくても私と清秋さんの仲じゃないですか」

「昨日の夜会っただけの君とどんな仲があるんだい」

「昨日の夜の事を私に話させるんですか？　別に私はかまいませんが……、こんな昼間からするような会話じゃないですよ」

「そんな切ない顔で僕を見るな！　そして出美さんもそんな軽蔑したような目で僕をみないで！　ただの誤解です！！」

会って早々に危うく体力も今後の学生生活もすべて持っていけるところだった清秋は、出美から放たれる絶対零度の視線に耐えつつ誤解である事を説明する。

一言話す度に二葉が口を挟んできたため、普通に説明するよりも倍以上の時間がかかったが、なんとか出美は信じてくれたようだ。

「それで二葉ちゃんは家出してどうしようかと途方に暮れている時に公園で清秋君とたまたま遭遇したのね」

最終確認のためか出美は二葉に確認をとる。『たまたま』という単語に少し棘があったように感じたがその辺は気にしないことにした。

「たまたまと言ってしまえばそれまでですが、もしかしたらこの出会いは運命で、これから二人の物語が紡ぎだされるのかもしれない」

「そんな物語に発展しないように出来る限りの努力をするよ」

目の前の常にフルスロットルな中学生の相手をするのに少し息切

れを起こす。この少女は真面目に答えるという事ができないのだらうか。

「ところで二葉ちゃんはこんなところで何をしていたの？」

「そういえば、危うく忘れそうになってたよ。僕たちが言うのもなんだけどここは立入禁止のはずなんだけど」

その言葉を聞いた瞬間にギクリという擬音が聞こえてきそうなくらい一瞬二葉が焦るのがわかったがすぐに平常心を装い、何もなかったかのような顔をする。

「べ、べべべ別に誰かに追われてるとかそんなことは決してないのですよ」

しかしどうやら言葉は平常心に戻せなかったようで、全く隠し通せていない上にはつきりと答えてしまっている。

しかも「だれかに追われている」なんて言葉を聞けば確実に食いついてくる人がいる訳で

「それはどういうこと？ やっぱ今回の事件は何かあって裏で組織が動いてるのね」

「な、何を言ってるんですか。事件とか組織とかなんなんですか？ ちょっと、そんなに揺さぶらないでください」

電波モード全開の出美に両肩を掴まれて前後に揺さぶられる二葉。今回言葉に詰まったのは何かを隠しているという訳ではなく、ただ単に出美が格闘家よろしく二葉までの距離を一気に詰めてきたからだ。

このまま強制ヘッドバンキングを続けて二葉の頸椎がやられても誰も得をしないので、清秋は目の前で中学生を虐待している上級生の両手を掴む。

「止めないで清秋君。このまま逃げられたら大変よ！」

「何が大変なのかは置いておくとして、そろそろ元に戻ってください電波先輩。二葉ちゃんもそろそろ限界です」

電波先輩の目の前には漫画のように眼をぐるぐるに回した二葉が「ぎもぢわるいです」と、朦朧とする意識の中で呟いている。

そして少しの間四つん這いでぐったりとした後、近年まれにみる『強制ヘドバン』と言う名のアトラクション終わりの少女はまだ少し青ざめた様子でなんとか起き上がった。

「別に変質者に追われてるとか、警察に追われてるとかじゃないですよ」

と言う割には周りを警戒しているようで、ここがスーパーとか店の中なら万引きをしているんじゃないかというほどの挙動不審ぶりです。まさかどこかの店で万引き、もしくは食い逃げをしてきたんじゃないだろうか。

「言つときまずけど犯罪行為は全くしてませんからね」

ジト目で念を押される。

そんなに自分は顔に出していたのか、心を読まれたようだ。

「じゃあ誰に追いかけられてたって言うんだい？ 僕には他に追いかけられる理由になりそうな事を思いつかないんだけど」

「家族……です」

家族？ そういえばこの子は家出癖があるんだったか。

しかしそれにしては表情があまりにも優れない。確かに家出なのだから捕まりたくないとかそういった感情があるだろうが、それ以外にももっと違ったものが二葉表情からは感じられた。まるで命でも狙われているような、肉食獣に追いかけられているようにも見える。

それに一般的に家出というのは親に心配してほしいといった事が原因だったりする。普段から家出しているという彼女も恐らくこの部類なのではないだろうか。

「そういえば一昨日から家には帰ったの？」

「はい、さすがにお風呂に入れないし着替えもありませんでしたし、ていうか財布を落としたのが失敗でしたね」

家出中に財布を落とすなんてどれだけ運が無いんだろう。それにすぐに風呂とか着替えを考えるあたり女の子だと思わされる。

「ところで清秋さんたちは何をされてたんですか？」

その質問に対してすぐに食いついたのは説明するまでもなく出美であった。

「私達は事件の調査よ！」

何をとかなぜとかすべてすっ飛ばして一言で済ませた。このあたりが夜の出魅と通じるところがある。

出魅の場合は優秀なる秘書替わりの雀が付いており、補足説明をくわえていたが、今はもちろんあの片眼鏡少女はいない。となるとその役回りは自動的に清秋に回ってくる。

「えっと、一昨日ここで起こった事件については知ってる？ 全身の血を抜かれた死体が発見されたっていう事件だけ」

清秋は自分たち——というか主に出美——がここ数日起きているホームレスの人たちが行方不明になっているという事件について調査していること。また、それは宇宙人やその他未知の生物の仕業ではと——主に出美が——考えている事を話した。

どうせ「そんなことあるわけじゃないですかー」とか言われて笑い飛ばされるだろうと考えていた清秋だが、二葉の反応は違った。

「そんな危ないことはやめた方がいいです。もし清秋さんの命にかかわる事かもしれませんし」

あまりにも真剣に、まるでその事件の事を知っているかのような口ぶり。それでいて冷静に首を突っ込まないように促す。その言葉にはいつものふざけた調子など全くなく、中学生の台詞にしては重みがあるように感じられた。

「まさか、二葉ちゃんは何か知っているの？」

「だめです。そんな危ない事に巻き込める訳ないじゃないですか」その言葉は自分はその事を知っており、その上関係者であると言っているようなものではないか。

それに今の彼女の家出中。その事件と関わっているのではと考えさせられるのには十分異常な行動である。

目の前に大量行方不明事件に関係している少女がいる。そしてそ

の少女が一昨日の事件と何らかの関わりがあると分かれば誰でも同じ行動をとるのではないだろうか。

「二葉ちゃん。警察に行こう」

出美もその辺の常識はあるようでそれ以上オカルトな発言はしない。

「嫌です。そんなところに行っても意味がありませんし、私の話なんか信じません」

「でも……」

「でも何も、例えばこの街には人の血を吸う怪物がうろついているとか言われたら信じますか？」

数日前ならそんな事は信じられずに目の前の女の子の頭がおかしくなったのではと思うだろう。

しかし今の清秋は違う。血の塊に襲われて、清水出魅という女に会った。

そんな中で放たれた彼女の言葉を疑う理由がどこにあるだろうか。「信じるに決まってるじゃないか。そんな顔をしていれば二葉ちゃんが嘘をついてないのぐらいわかる」

その言葉に二葉は信じられないというように眼を見開く。

「まさか……、清秋さん」

「みーつけた」

二葉が言葉を言い終える前に別の声が割り込んだ。それはもちろん清秋も出美の声でもない。

「ちょこちょこと逃げ回るもんだから見つけるのに苦労したわ」

そこに立っていたのは金髪青目の人物。その少女とも女性とも言い難い容姿は日本人にはない美しさを秘めており、しかしその反面でその表情は不気味としか言えない。

すべてを見下すような笑み。まるで仮面でも貼り付けたのではないかというほど感情のないその表情はその場にいる誰もが、いや、他の誰が見ても嫌悪感を抱くだろう。

「ああ、まずは自己紹介からね。私は前嶋一葉。二葉の姉です」

自己紹介という当たり前の行為。それがなぜか不自然に、この女がすると不気味にしか見えなかった。例えば部屋に置いてあった人形が夜中に話し始めたような、その言葉の内容に関係なく目の前の女が話しかけてくる事に関して『怖い』という恐怖しか与えなかった。

「私の顔に何かついてる？ そんな人外のものでも見るような目つきで。ただ私は愛しい妹を迎えに来ただけなのに」

「あなたはお姉ちゃんじゃない！」

先ほどの少女とは思えないような吐き捨てるような声。

「まああなたが戻ってこないというのならそれでもいいけど。ただあなたはそれでも生きていけるのかしら」

「そんなのなんとかできる。あの人の助けなんか必要ないわ」

「なんとか出来ればどれだけ楽かしらね。私たち化け物は普通には生きていけないのよ。あなたも、私も、そして清水出魅、あなたもね」

その台詞を言い終わらない内に清秋の視界から一葉が消える。

「きゃあ！」

声の方向を見ると、そこには出美が一葉に後ろから抱きつかれている状態だった。

抱きつかれているといってももちろん好意などと言ったものは一切ない。

「どうしたの出魅。あなたならこれぐらいすぐに振り解く？」

舐めるように両手を使って出魅の全身をなでまわす。まるで獲物の味を確かめるようにゆっくりと全身に腕を這わせる。

「ど、どういう事？」

出美の声は震えており、今の状況が全く理解できていない。そん

な状態で声を出せたことだけでもほめられるべきだろう。

いくら本人がオカルト好きだといってもそれは頭の中での想像でしかない。そういったものを現実に見たことなどないし、体験した事もないのは明白だ。

「あら、もしかして休眠状態なの？ あアンコントラブルの『傍若無人』とも言われた怪物がこんな状態になってるなんてね」

「その人を放して、お姉ちゃん」

「さっきは私のこと『お姉ちゃんじゃない』なんて言っただのに随分勝手な言い草ね。いいわよ、放してあげる。ただしちょっと遊ばせてもらってからね」

言うや否や一葉は行動を起こしていた。

そして一瞬にして清秋の視界が赤く染まる。何が起こったのか分からないまま顔に付着した暖かいものを拭い、状況を確認する。

目の前にいたのは腹部から赤い花を咲かせた出美の姿だった。いや、花というのは背中から貫通した一葉の腕と付き破られた腹の肉や血が染めた放射状の模様である。

脳が処理落ちを起こしたように目の前景色を認識しない。グロテスクだなとただ、絵を見ているだけのような感覚。

「うん、なかなかおいしいじゃない。やっぱり人間の肉とは違うわね」

グチュリと嫌な音を立てて一葉の腕は引き抜かれ、それに付着した肉片や血をまるでホイップクリームを舐めるようにして一葉は舌で味わう。

一葉のその行為はただ単に食後のデザートを食べるのと等しく、味覚を通じて脳に快楽を与える為の行為。人間が食事をするのと同等のものなのだ。

「さてと」

寒気を感じるような目線。目の前の『デザート』を全て平らげる事もせずに、怪物は次の獲物に清秋を選んだ。

「頭か腕か足か、どこから食べてほしい？」

第十二話…化け物

腹部に風穴をあけられた出美は、痛みとショックとで完全に気を失い、かろうじて一葉に首を掴まれて立っている状態だ。

いくら一葉の手が細くても人の腕が体を貫通したのである。もちろん内臓も潰されただろうし、もしも急所が免れていたとしても放っておけば失血死で死んでしまうだろう。

それぐらい出美の腹からは赤い液体が大雨時の雨樋から溢れる水のように流れ落ちていく。

「あら、これぐらいで気を失うなんてっ、つまんない。もうちょっと楽しめると思ったのに」

一葉はそう言うと思いでいた出美の首を放す。

もちろん意識が無い出美はそのまま糸の切れた操り人形のように地面に崩れ落ちる――

「――っぐ――っ」

ことはなかった。

そのまま土の上に倒れると思われた出美は一瞬ぐらりと体が揺れたものの、二つの足で踏ん張り、体勢を少し低くした状態で止まった。

そしてそのまま両の手をだらんと垂らして顔は指先を見るように俯いている。

「出美さん、大丈夫ですか」

もちろん大丈夫なはずはないだろう。

なにせ腹を貫かれているのだから常人なら普通立っている事も出来ないはずだ。

しかし出美は崩れた体勢を戻し、普通に背筋を伸ばして立つ。

腹部から流れている血がまるでただの飾りで「ケチャップを入れていた」と言われても信じてしまうほど痛みを感じている様子は無い。

そのまま頭を垂れた状態で出美は一步一步ゆっくりと清秋に歩み寄ってくる。まるで近所を散歩するような軽い足取り。今にも「さあ帰りましょう」とでも言いだしそうだ。

いや、おかしいだろう。

この場の誰もが、原因となっている一葉でさえこの異質な空気に気付いた。

腹を貫かれた人間がこうも悠然と歩いていられるだろうか。

『常人なら普通立っている事も出来ないはずだ』

もちろん出美は夜になれば出魅となり超能力を使えるようになる。しかし、仮にそう言った力を使えるようになったとして激痛を感じずにいられるだろうか。

アドレナリンの過剰分泌によって痛みを抑えられると言った事もあるが、先ほど出美は気を失っていたではないか。そんな状態ですぐに意識を取り戻す事などあるはずがない。

考えている間も出美は清秋に向かってゆっくりと歩いて来る。

清秋は出美に悪いと思いつつもその光景が不気味だと思った。

何も声を発する事なくゆっくりと、まるで何か幽霊にでも憑かれたようにゆらゆらと歩を進める。

「出美さん？」

名前を呼んでもても声で答える事はせずに、ゆっくりと顔を上げた。

その顔を見て清秋はこれが異常な事だと確信する。

出美の顔、正確にいうなら眼がおかしかった。

まるで獣のように感情が消えうせ、瞳が縦に割れている。

そして圧倒的に先ほどと違っているもの。

瞳の色がまるで流血しているのではないかというほど真っ赤に染まっているのだ。

眼球の白色とのコントラストで少し美しいと感じてしまうほどの

深紅。

その二つの眼に見つめられて清秋は身動きがとれなくなる。
化け物。

そう思わざるをえない出美の変容に清秋は恐怖を覚えた。

その恐怖から逃げだそうとしても体を動かす事が出来ず、化け物が距離を詰めてくる。

そしてそのまま吐息がかかる距離まで近づいた後、

ブスリ

という音が清秋の耳に聞こえた。

「痛う……」

そしてその音が自分の首筋に痛みを与えているのだと気付くのに時間はかからなかった。

それもそのはず、目の前の出美は清秋の首を上下の顎で挟みこみ、その口内にある針のようなもので噛みついた首の皮膚に穴をあけているのだ。

痛みは一瞬で無くなり、一瞬刺された部分が熱を持ったようにジワリと熱くなったように感じたが、直ぐにその感覚は無くなり、それは痺れを経て電気信号を完全に遮断したのか全く何も感じなくなつた。

ゴクリと、耳元で出美の喉がなる音が聞こえる。

首はまるで自分の身体の一部ではないような気分だが、何が起きているのかは理解できる。

出美が自分の血を吸っている。これではまるで彼女が……

「吸血鬼」

清秋の言葉を二葉が代弁した。

「フ、フフ。ようやく眼を覚ましたようね、清水出魅。『呪われし血族』の末裔にして『傍若無人』と恐れられた怪物」
エペシユ
アンコントローラブル

「ああ、そんな名前を名乗った時代もあったかな。いや、前者はただ使われているのだったか。少なくとも後者は数十年前の呼び名だよ」
ブラッドオフツ

一葉の言葉に聞き覚えのある声が答える。

もちろんこの声は先ほどまで聞いていた出美の声と同じだが、英国紳士のような堅苦しい口調はもちろん出美ではない。

清水出美の夜の顔。清水出魅が清秋の横に腕を組んで立っていた。先ほどまでの豹変した出魅がただの白昼夢であったのではないかと思えるほどの自然な態度で、威風堂々とした態度である。

腹部に空いた穴は完全に再生したのか、敗れた服からは白い肌が一滴の血で汚れることなく夕日を映してほんのり赤く染まっている。先ほどの出来事が夢でないと判断できるのは自分の首筋に空いた二つの穴、出魅が噛みついた後である。

しかしその傷跡からも流血する事はなく、すでに治癒し始めているのか瘡蓋かさふたが出来あがっている。

「いやあ、すまなかったね葛葉清秋君。さっきは清水出美の体が持ちそうになかったので、私が出てこざるをえなかったのだよ。ただ、緊急時だった事を踏まえても直接噛みついたことは謝罪するよ。すまなかったね」

「いえ、ちょっとびっくりしただけですから。それより一体あなたは何なんですか？」

「何、とはなかなか酷い言い方じゃないか。ふむ、しかし犬猫を物として扱う人間からしたら化け物も物とするのが妥当なところかな」

出魅は腕を組んだままシニカルな笑みを浮かべる。

「まあ難しい話は後にしてとりあえずこの状況をどうにかしようじゃないか。なあそうだろう、あー」

「前嶋一葉よ」

「前嶋一葉君。どうやら君も私と同じ化け物に分類される物らしいが、どこの種族だね？」

「はんっ。私があなたにそんな事を言う義理は無いでしょう」

「ははは、そりゃあそうだ。社交パーティーじゃあるまいし、誕生日や年齢を聞くこともないな。さてさて、ではどうしたものか。私

としてはここで一戦交えるのは少し控えたいと思っているのだよ。もうすぐ暗くなるとはいえ私の本領を発揮できるのは昔から文献や映画で言われているように夜なのでね。もちろんそれ相応には戦えると思うのだが、君を満足させられるかは保証できないのだよ」

「フフ、日本ですむとそこまで奥ゆかしくなるのかしら。まあ私もあなたと戦うなんて願ひ下げよ。太陽の出てる時にあなたと戦って負ける気はしないけど、無傷で帰れる程簡単な相手ではないって事は理解してるしね」

お互い負け惜しみでもなんでもない。お互いの損得を考慮したただの交渉。

「そうね……、じゃあ今回はお互いのためにも停戦協定でも結んでおきましょうか」

「そうと決まれば早々に立ち去らせてもらおうかな。葛葉清秋君にも少し説明しないといけない事があるのでね」

そう言うとお魅は清秋について来るように言って颯爽と歩きだすと、数歩歩いたところで足が止まった。

「そのツイントールの可愛いお嬢さんもついてきて貰えるかな。

君には私から聞きたい事がある」

「は、はい！」

まさか自分に話しかけてくるとは思っていなかったのか、二葉は髪の毛をびよこんと揺らして驚いた表情を作る。

今度こそ出魅は後ろを振り返ることなく、颯爽と公園の出口に向かって歩き出した。

第十三話：自己紹介

出魅について行くと数分でオカルト部の部室に到着した。

学校内に中学生である二葉を入れてもいいのかは分らないが、そんな事を気にするでもなく出魅は我が家に帰るような気軽さで部室のアルミ製ドアを開ける。

「あら、お早いお帰りですね。それに、出魅さんがこんな時間に、珍しい」

「ああ、色々あってね。とりあえずこの服をどうにかしたいのだが、確か奥に替えの制服があったかな」

言いながら出魅はいつも雀がお茶を入れに行く給湯室らしき小部屋に入って行った。奥は倉庫にでもなっているのだろうか。

「この時間に出魅さんが出てきているという事は何か不測の事態があったんですね」

昼間の忠告を守れなかった所為か、心なし声と表情に棘がある。

「ちょっと襲われてね。それで出美さんが大怪我をして」

雀に先ほどの出来事をあらかた説明する。と言っても清秋では理解不能な事が多かったため所々省略したり言葉を変えたりと、出来事の流れを話すので精いっぱいだった。

しかしそれでもなんとか通じたらしく、雀はフンフンと相槌をうちながら聞いていた。

「出美さんが普通の人間なら冗談ではすまなかったんですよ」
今度は呆れ混じりでの台詞。

確かに、あの場はなんとかあったものものしも自分や二葉が襲われたりしていたら取り返しのことにならない可能性もある。

「まったく、何のために武器を渡してあると思ってるんですか」

「武器？」

「覚えてないんですか？ 初めてあなたがここに来た時に渡した」

というところの空気銃だろうか。すっかり失念していた。木の幹も軽く貫通する程の銃なのだから相手を追い払うぐらいはできただろう。

「でもあんな威力じゃ相手もただじゃ済まないだろ」

「ということは撃てたんですね」

「撃てたけど……、何か問題でもあったの？」

あんなもの誰でも撃てるだろう。小学生でも引き金を引くだけで自動的に銃口から弾が射出される単純な造りを操作できないものなどほとんどいない。

「いえ、その事についても後で説明させてもらいましょう」

そう言うところの雀はソファから立ち上がり、奥の小部屋へ向かう。また例のごとお茶でも入れにいったのだろう。

毎度毎度まめな事だ。もうなんか彼女はこの部屋ではお茶くみ人形か何か何かという印象が染みつきそうだ。

「ところで清秋さん、この素敵空間は何なんですか!？」

清秋が雀の存在意義について考えていると、すっかり忘れ去られていたツインテール異国少女が鼻息を荒げながら飛び出したシャンパンの蓋のような勢いで話しかけてきた。

「外見からは全く予想できないような豪華な内装、高級感漂う家具類、どこのオフィスですか!」

「ですかって言われても僕は知らないし。部屋らしいけど」

「部屋? こんな綺麗な部屋を持ってるなんて。ここに比べたら私の学校の部屋なんて犬小屋です。いえ、ゴキブリホイホイです!」

それはさすがに言いすぎだ。というかゴキブリホイホイは誰も住んでないだろう。確かに印刷されているパッケージは家みたいな模様だが、あの茶色い悪魔が棲んでいるところを想像するとゾッとする。

「ていうか二葉ちゃんは何か部活動してるの?」

「いえ、まだ私も入学したてですからいくつか仮入部をしているところですよ。そこで色々回ってるんですがこんなに綺麗な部屋を見

るのは初めてです」

「ほう、うちの部室が気にいったなら入部してみるかね？ 君なら条件も満たしているしね」

いつの間に帰ってきたのか出魅が音もなく後方に出現する。

その横には盆の上に人数分のカップを乗せた雀が秘書のごとく控えている。

「何言ってるんですか出魅さん。まず中学生が高校に入ってくる事自体難しいのに部活なんて出来る訳ないじゃないですか。それに条件って？」

「我がオカルト部は年齢問わず老若男女部員を受け付けているよ。ただし、魔法や超能力、または人間でない何者かであるのが条件だけだね」

出魅はソファにどっかりと腰かけて足を組み、右手人差し指を立ててくるくると回す。

すると雀の持った盆からカップがふわふわと遊園地のアトラクションのように回転しながら浮かび、静かにテーブルに着地した。

「ちょっと待ってください。じゃあ僕は条件を満たしていないんじゃないんですか？ 僕はただの一般人です」

「いいや違うよ葛葉清秋君。君には力がある。君自身が自覚していないだけで大きな力が眠っているね」

「そんなこと……、何か証拠でもあるんですか？」

「あの銃を使った事が証拠です」

と、向かい側に腰かけた雀が話に入ってくる。それを見て出魅は「どうぞ」といった仕草を見せて雀に話を引き継いだ。

「あの銃は使用者の魔力を火薬代わりに打ち出す銃です。つまり、あなたがその銃を撃つことができたという事はあなたに魔力がそれ相当の力があるということです」

それを聞いて清秋は目まいがしそうになった。今の今まで周りが化け物だらけだと思っていたが、まさか自分にもその素養があるなどとは夢にも思っていなかったし、これからも思う事はなかっただ

ろう。

魔力？ そんな事突然言われて信じられる訳がなかった。

「まあそれについては追々慣れていくことにしようじゃないか」

はっはっはと快活な笑い声を上げながら清秋の頭をぽんぽん叩く。

「さて、じゃあ改めて。私は清水出魅、この部活動の部長をしている。そしてこっちが佐々木雀」

「前寫二葉です！」

両者ともに名前を名乗るだけの簡単な自己紹介を行う。

「うむ、元気があって大変結構。前寫二葉君か、これからはよろしく。君をここに連れてきたのはもちろん理由がある」

「私が人間じゃないってことがわかってるんですね」

世間話でもするように唐突に、二葉の口から信じられないような言葉が飛び出す。

「ちょっと待ってください部長。二葉ちゃんが人間じゃないってどういうことですか？」

「それについては私に聞かなくても本人が目の前にいるだろう」

もちろんその通りなのだが、目の前の少女に対して「君は人間じゃないのか？」と聞くには誰だって抵抗があるだろう。

清秋が二葉に直接聞くか迷っていたが、口を先に開いたのは二葉であった。

「気を使わなくても結構ですよ清秋さん。私は人間じゃありません」

「そんな事突然言われ立って信じられる訳ないだろ。二葉ちゃんは普通の女の子じゃないか」

「私や出魅部長も見た目は普通の女子高生です。でもその内に持っている力は普通じゃない。見た目だけでその人が普通の人間か、もしくは人間でもないのかなんて判別は不可能に近いんですよ」

ダメ押しのような雀の言葉。その台詞に反論する事も出来ずに清秋は黙ってしまう。

そんな清秋にニコリと笑顔を見せてから快活に話します。

「私は食屍鬼^{グール}です」

食屍鬼。アラブの伝承に登場する怪物でその名の通り人を食べる。ただその地域によって伝説はばらばらで、生きた人間を食べる者もいれば地下に住まい死体を食べて生活しているとも言われている。ゲームや漫画だと灰色の醜い姿で描かれる事が多いが、目の前の少女はそれとはまったく対照的に生き生きとしており、金色の髪がむしろ輝いているように感じるほどだ。

どう間違ってもそんな怪物なんて想像できない。

「食屍鬼って言っても父さんは普通の人間だからハーフなんですけどね。つまり人種はイギリス人と日本人のハーフで、種族は人間と食屍鬼のハーフ。全部の血が四分の一ずつ入ってます！」

「いや、その計算はおかしいよ」

「細かい事は気にしないのがいい男の条件ですよ」

「そんな条件聞いたことないよ！」

すぐく真面目な話をしているのに二葉の話し方が軽すぎてどうも調子が狂わされる。

「大丈夫です。清秋さんは私の中ではぎりぎりいい男の位置にいますから。もう少し高感度メーターが上がったら告白イベントもあるかもしれません」

「もう全然訳が分からないよ！」

「この女たらし……」

「なんか僕が悪いみたいになってるし！」

ぐあー、と頭をかき乱しながら叫ぶ清秋と、それを面白そうに見ている二葉に対して雀は軽く咳払いをして静かにさせる。

軌道修正。まるで雀が裁判官の小槌ガベルのように部室に静寂を取り戻させる。

「これは友人同士の雑談の場じゃないんです。もっと真面目に話してもらわないと」

「まあまあ佐々木雀君。せっかくの客人……いや、これから仲間になるのだから楽しく話そうじゃないか」

出魅がシニカルな笑みを見せながら雀を制する。

「さて、ではそろそろ私も話に混ぜてもらおうかな」

そう言うのとテーブルに置いたカップを手に取り、真っ赤に染まった紅茶を少量口に含んだ。

「先ほど前寫二葉君が食屍鬼だという話だったが、私は吸血鬼だ。はは、これでこの場にいるのは怪物と人間が半々になったね。

心配しなくても大丈夫だよ葛葉清秋君、佐々木雀君はれっきとした人間だ。

さて、私の事についてだったかな。吸血鬼といっても別に火の下に出たからといって灰になったり発火したりはしない。まあ一般的な人と比べて少し日焼けがしやすくなる程度かな。

そして吸血鬼の力が使えるのは夜限定だ。より詳しく言うなら午後六時から午前六時の間。その間は吸血鬼特有の力が使える。

今はまだ見せた事がないが、常人より早く動けたり、爪や歯がするどかったりするんだ。

特に一番便利なのは治癒力だ。さっきも見てもらったとおりどんな大怪我でも一瞬で回復できる。

ではなぜさっきは吸血鬼の力である治癒能力が日中に使えたかって？ まあ焦らずとも説明するよ。

吸血鬼が力を使えるのは午後六時以降という条件以外にもう一つある。

そう、さっきのように人間の血を吸った時だ。吸った量によって吸血鬼状態を維持できる時間は違っているが、まあさっきの量だと今日の午後六時までには持つだろうね。

ああ、心配しなくてもこんなことはめったにないよ。日中に能力を使わない時は吸血行為を行わなくても生きていけるからね。

さて、とりあえず私からの説明はこんな感じなのだが、何か質問はあるかい？」

本格ミステリの探偵よろしく一気に説明を終えてしまう。

そのまま辞書にでも乗ってるんじゃないかと思える程の説明に対して特に質問も出るはずもなく、そのまま沈黙が流れる。

「うむ、理解してもらえたみたいで安心したよ。さて、それじゃあ今後の動きについて説明していこうか」

「今後の動き？」

「そうだ、この事件を解決するための今後の計画だよ」

そう言うとお魅は不敵な笑みを浮かべて行方不明者のチェックが入った地図を取り出し、テーブルの上に広げた。

第十四話…作戦会議

「この地図って」

「そうだ。君の知っている通りこの地図は最近この街の行方不明が出た場所に印をつけてある」

それは知っている。

先ほどまで持っていたのは出美であり、人格が入れ替わっても体が入れ替わりでもない限り出魅がこれを持っていたとしても何らおかしい事はない。

問題はなぜこの地図の印の意味を知っているかだ。

出魅と出美は記憶を共有していないということだったので出美が日中に捜査をしているという事を出魅が知っている訳がないのである。

「何を不思議そうな顔をしているんだい葛葉清秋君。私がこの印の意味を知っている理由は簡単なものだよ」

紅茶を啜りながらまるで清秋の心を読んだように得意げな笑みを浮かべた。

「私もこの件については気になっていた。つまり大体の事件が起きた場所は把握していたのだよ。だからこの地図を広げた瞬間にこれが行方不明者が出た場所だと気付いた。ほら簡単なことだろう？」

という事はこの先輩は何も分からずこの地図を広げてそれを一瞬で何であるか判断したのだろうか。

そんなアドリブを自信満々に言う事など普通できないだろう。

「で、この地図が何なんですか？」

「ん？ そうだねそれについて説明する前に……そろそろ時間のよ
うだ」

そう言うとお出魅は壁に掛けられたアナログ時計に視線を向けた。
釣られて清秋も時計を見る。時間は六時丁度、と確認したと同時に学校のチャイムが部屋中に響いた。

出魅の人格の入れ替わり、吸血鬼化を知らせる鐘の音はまるでこの部屋の壁がすべて反響板になっているのではないかと思える程大音量で、鳴り終わっても余韻が残った。

そしてその残響が無くなったと同時に

コン、コン、と軽くドアがノックされた。

こんな時間に訪問者だろうか？ いや、しかしすでに先ほどのチャームが下校時刻を知らせる者である。一般の生徒はこんな部室に寄り道などしている暇は無いだろう。まさか教師や風紀委員などが遅くまで残っている自分達を早々に帰らせるために見回りでもしているのだろうか。

「ああ、鍵はかかっているから入って来たまえ」

しかし出魅は誰が来たのか事前に知っているらしく、客人を部室に招き入れる。

「失礼します」

まず声だけが少しだけ開かれたドアの隙間から入室し、次に足、そして全身が順番に部室の中に入ってくる。

「まったく、君はいつも遅くもなく早くもない到着だね。女性と待ち合わせをする時は最低でも十五分は速く着て置きたまえ。といっても十五分前でも私は着いているんだが」

「時間厳守が僕のモットーですから。一応次からは気を付けるようにします」

「そんな事をいって、どうせ次も秒単位で正確に到着するのだろう。まあずっと立っているのも疲れるだろうから座りたまえよ。杉山浩太君」

ドアの向こうから現れ、出魅とやり取りをしたのは清秋も一度見た事のある顔。昨日家を訪れた山田という刑事と共に行動していた男だったはずだ。

そんな男がなぜこんなところにいるのだろうか。

「やあ清秋君。君と会うのは二回目だね。あの時は全然話を出来なかったけど改めてよろしく」

ピシツとしたグレーのスーツを着た杉山は切れ長の目を細め、人の良さそうな笑みで丁寧にお辞儀する。その一連の動作や自信に満ちたような話し方は、どこか出魅と同じような雰囲気を感じさせる。

「杉山浩太君は非科学現象捜査課の刑事だ」

「ひかがく……?」

「非科学現象捜査課。別名非科学課とも言うんだけど、捜査内容としてはその名のとおり科学で説明できないような事件の捜査、および一般への情報隠ぺいが主だね。簡単に言うと日本版MIBみたいなものかな」

MIBなどという実際に存在が不確定なものについて、さも存在しているかのように話す。それは直接自分達が隠れた存在であると言うよりも信憑性が増した。

「信じられないのも無理は無い。そもそも幽霊や宇宙人とかいったオカルトな話自体馴染みがないのに、警察にそんな組織があるなんてことは予想もできないだろう」

杉山はなれた口調で言う。

「さて、では自己紹介もそろそろ終わって話に戻ろうかな」

「いやはや話の腰を折ってしまったみたいで申し訳ない」

気にするなというジェスチャーを杉山に送りながら紅茶で口を潤してから出魅は元の話題に戻した。

「この地図だが、見ての通り印がつけられている。葛葉清秋君、これを見て何か分かる事はあるかい?」

「特に何も……。強いて言うならこの街に固まってるということぐらいでしょうか」

「うん、そうだね。固まっているという事に気付いた事は評価して、なんとか合格点かな」

まるで難しい問題を生徒に教える家庭教師のように、分からなかった事を責めるでもなく答えに導くような口調。

「確かに二次元の情報からだとかこの事件の場所が固まっているということぐらいしか分からない。といっても三次元にして高さを付け

たからといってほとんど変わらないんだ。じゃあどうするかわかるかい？」

「四次元。時間でしようか？」

「大正解」

言いながら指先をクルリと一回転させ正解の丸を描くような動きをする。

しかしどうやらそれは清秋を褒めたと言う訳ではないらしく、テーブルに置いてあった紅茶のポットが動いて出魅のカップに赤い液体を注いだ。

「では葛葉清秋君が言った用に時間を書き加えてみよう。まずここが杉山浩太君の調べた中で最初に事件が起こったところ」

地図の中心から少し北寄りの小さな公園に書かれた印の横に赤いペンで『1』という数字を書き込む。

「そして順番に二番目、三番目の現場」

順番に数字を書き込んでいき、十三番を書き終えたところで清秋は気付いた。

「あ」

「気付いたかい？ そうだこの事件は規則性がある。犯人は出来るだけ離れた場所をと選んでいたようだが、これだけの数があれば逆に目印のようになってしまっているね」

二番目の事件は最初の事件から南にずれた場所。三番目はそこから北東に向かった公園、次はそのまま西方向の空き地。まるで感染症患者の分布図のようにあるところを中心として事件が円形に広まっている。

「そうだ、この地図に番号を付けるとおのずと犯人がわかってしまう。事件が円形に広まっているという事はその中心が犯人のいる場所、もしくは深く関係した場所だと思えるのが妥当なところだろう。

そしてその中心となる一番犯人の疑いがある者がいるところは……」
ゆつくりと出魅の指が赤い印で出来あがった分布図の中心に伸ばされる。

「前寫医院」

ガタツ

出魅の言葉を言い終わるかというタイミングで、大きな音と共に机が大きく揺さぶられた。おかげでティーカップは倒れなかったものの、中に入っていた紅茶が少しテーブル上に零れて小さな水たまりを作った。

「どうかしたかい？」

零れた紅茶を指一本で綺麗にカップの中に戻しながら、動じることなく出魅は尋ねた。

その言葉向けられた相手は二葉。彼女が突然立ち上がった際に机に手をついたために大きな音を立てたのだ。

「どうかしたのかと聞いているんだが。前寫二葉君」

出魅が質問を繰り返すが二葉は口を空けようとしていない。

むしろギリリという音が聞こえそうぐらい奥歯を強くかみ合わせ、俯き加減でテーブルの一点を見つめている。何も言わないと全身で主張しているようだ。

両手は強く握りしめられてられており、力の入れ過ぎで全身が震えていた。

そんな二葉を見て答えは帰ってこないものと判断したのか出魅は独り言のように、しかし二葉の方を向いたまま話を続ける。まるで美術館に飾られた絵の感想でも言うように淡々と。

「ふむ、そう言えば君の名字も前寫だったね。もしかすると何か関係あるのかな？ いや、別にそこまで珍しい名字でもないから全く関係ないのなら悪いが、今の君の行動からすると疑わざるを得ないよ。もしかすると前寫医院というのは君の親戚か、もしくはそれ以上の血縁のある者が経営する病院なのかな？」

畳み掛けるように質問する。

その間も二葉は口を開こうとはせず、さらに全身に力を込めたの

か、はつきりと齒の軋む音が聞こえた。

そしてしばらく部室の中に沈黙の空気が流れた後、

二葉は弾かれたピンボールのようにドアから飛び出してどこかへ駆けて行ってしまった。

「ちよつと部長。今のは言いすぎじゃないんですか？」

清秋は追いかけてようとしたが、食屍鬼^{グール}の身体能力は人間よりもかなり高いらしく、開け放たれたドアからはすでに二葉の姿を見つけれない。

情けなくも、過ぎた事に対する抗議ぐらいしかできなかった。

「いや、むしろ私は氣を使ったのだよ」

「氣を使った？」

「私の能力や吸血鬼の身体能力を使えばもちろん、彼女を取り押さえて無理矢理この場に残す事も出来た」

「じゃあなんでそうしなかったん……」

「それで話す気になるかい？ もちろん尋問、場合によっては拷問をして聞き出す事も出来たよ。しかし無理矢理にその人の家庭事情に踏み込んで情報を聞き出したとして、聞く側も聞かれる側も気持ちのいいものかな？」

「……」

何も言えない清秋を見ながら、出魅はシニカルな笑みを浮かべながら続ける。

「答えは否だ。無理矢理に聞こうとするとかえって答えたくなくなる。ほら、かの有名な北風と太陽の話と同じだよ」

「それでも情報を得られないよりはいいんじゃないんですか？」

北風と太陽ならばむしろ先ほどの会話とは逆に、責めるような言葉ではなく、優しく相談に乗るように聞いた方がいいのではないだろうか。

「君は女心を分かっていないな」

「は？」

なんの脈絡もない言葉に清秋の頭は混乱する。

今の言葉のどこに女心を気に掛けなければいけないような場面があったのだろうか。

それに出魅——少なくとも夜の彼女——に女心がわかっていないなどといわれてもいまいち言葉に力がない。

「女に限った事ではないかもしれないが、人は周りから拒絶された時ほど頼れる者が現れた時に心を開きやすくなるものなのだよ。ああ、北風と太陽の例えは適切じゃなかったかもしれない、訂正しよう。飴と鞭、いや、順番で言うとな鞭と飴になるのかな」

「言っている意味がよくわからないんですが」

「つまり先ほどは私が鞭となって部外者である彼女を拒絶した。そこで飴の役割をするのが君だよ、葛葉清秋君」

ビシィッ、と演技がかった動きで出魅は人差し指を清秋の方向に向ける。

「君は私達が会うのとは別で彼女と接触している。つまりこの中のメンバー内では一番彼女と近い関係だ。それに比べて他の者は初対面で、その中の代表である私が彼女を拒絶すれば他の者も拒絶したという錯覚を起こすのは簡単だろう」

清秋が反論する前に出魅は言った。

「というわけで彼女を追いかけたまえ、葛葉清秋君」

「って言っても二葉ちゃんがどこにいるかなんてわからないし」

「そんな訳ないだろう。人は何かから逃げる時、まず一番落ち着くところに行きつくものだ。しかも今の彼女は少し混乱しているようにも見えた。行動が短絡的になっていることも予想されるね。さて、君が彼女と会うのはどこかな」

会うと言ってもまだ二回遭遇しただけで、一度目は二葉が家を出した時、二度目は何かから逃げていた時。二回とも白桃公園で……
「あっ」

「場所はわかったようだね。恐らく彼女はそこにいるだろう。君は話を聞き出して情報を集めてくれ。私は先に前寫医院に向かっているから、後から前寫二葉を連れて来てくれ。杉山の形態に連絡すれ

ば車で迎えに来るだろう」

言いながら出魅は目線で杉山に指示をする。

すると杉山はすぐに内ポケットから小さなケースを取り出した。

「私が警察で使っている物ですが、裏に携帯の番号を書いていますので、仕事が終わりましたら連絡をください」

人のいい笑みを浮かべて彼はビジネスマンのように名刺を清秋の前に差し出す。

それを受け取り、清秋は急いで白桃公園に向かった。

第十五話：いつもの場所で

二葉を見つけるのはそう難しいことではなかった。

時刻は午後七時半、昨日と同じベンチに二彼女は腰かけていた。スポットライトのように彼女を照らす街灯は電球が切れかけているのかチカチカと危うい光を発している。その明かりの下で体育座りをしている二葉はいつも以上に一層小さく見え、電灯の明かりが消えると一緒に消えてしまうのではないかとどう不安を清秋に抱かせた。

学校からノンストップで走ってきたが、ここでさらに力を込めて二葉の近くに駆け寄る。

「清秋さん？」

その声にはいつもより元気がなかったものの、そこまで落ち込んでいないようで清秋を少し安心させた。

「どうしてここに？」

「いや、よくわからないけど、今までここでしか会った事がなかったからもしかしたらって思ってた」

「違う場所にするべきでした」

少し頬を膨らませてムスツとする。

そこで会話が途切れた。

出魅の言われるがままに部室を飛び出してきたものの、見つけてから何を話せばいいのかなど全く考えてない。

「私のお父さんは、昔は優しかったんです」

考えあぐねている内に二葉から会話を切りだしてくれた。

「私が小学校低学年の頃はお母さんとお姉ちゃんと四人家族でした。結構中はよかったんじゃないかと思います。お父さんも病院の院長で忙しい身でしたが時々時間を作って遊びに連れて行ってくれたり、夏休みには海に旅行に行ったりもしました。あの頃が私の中で一番……、いえ家族で一番楽しかった時間だったと思います」

視線を少し上に向けてその方向に映った過去の映像を見るように宙を見つめる。

「あの時もそんな楽しい休日の確か日曜日。四人で買い物に行った帰りでした。運転手はお父さん、助手席にお母さん、その後ろにお姉ちゃん、右側に私。」

もう数十分で家に付く場所、青になった信号を確認して私達の乗った車がちょうど交差点の真ん中に差しかけた時、車に突然衝撃がきて……

一瞬の出来事で、私は何が起こったのか分かりませんでした。気付いた時には車はひっくりかえっていて、車の左半分は完全に拉げていました。

トラックの信号無視による左側からの衝突。後から聞いた話ではそのトラックの運転手は居眠り運転だったらしいですが、そんな事は私に関係ありません。

お母さんは事故の直前にトラックに気付いたようで、一瞬の間に右側のお父さんをかばったらしいです。お母さんも食屍鬼でしたから普通の人よりかは力も体力もあったんですが、どうやら車体が潰れないようにするのは半分が限界だったらしくて、右側にいた私とお父さんは助かりました」

それで母親は命を落としたのだろう。しかし今の話だとか何かおかしくないだろうか。

「でもお姉さんは？ 今日の昼間は生きてたよね」

「お姉ちゃんはお母さんと一緒にあの時死んだはずですよ。トラックからの盾になったお母さんとはちがって身体の損傷は少なかったんですが、変形した車体で胸を潰されて死んだのは医者である父も確認しました。」

話を戻すと、父はその時から少し変になりました。日常的に私と接する時などはあまり変化ないんですけど、今までより帰ってくるのが明らかに遅く、数日泊まってくることもしばしば。私から聞いても答えてくれないし、何かを隠してるみたいでした。でもお父さ

んも寂しいのかと思ってあんまり詮索はしませんでした」

話過ぎて少し疲れたのか、昔を思い出して悲しみがよみがえってきたのか、そこで少し間を置いた。

「でもこの前、珍しく酔っぱらって帰ってきたんです。普段からお酒には弱くてあまり飲む方ではなかったのであそこまで酔ったお父さんは初めて見ました。しかもなにかいい事でもあったのか上機嫌で。『ようやく見つけた』とか『ついに成功する』とか言っていました」

「見つけたって何を？」

「わかりません。でもお母さんが死ぬ前から探してたらしくて、多分研究と関係してたのかも」

「研究って、二葉ちゃんのお父さんって医者だったよね？」

「はい。でも大学を卒業したあと母校と共同研究をしていまして、お母さんや私たち姉妹も協力していました。といっても血液を提供したり運動能力を測定したりと簡単なもので人体実験みたいなものはありませんでしたが」

二葉の母親は食屍鬼、そしてその娘である二葉とその姉は人間と食屍鬼の血を引き継いだハーフだったはずだ。となると彼女らの父親が研究していたのは人類以外の知的生物の研究か何かだろうか。

いや、大学という研究機関でそんな研究を行えるはずがない。

「お父さんは一体何の研究をしていたの？」

「不死の研究」

清秋の質問に対して二葉は目線を戻し、清秋を真っ直ぐ見つめて真面目な顔で言った。

その言葉があまりに予想外だったため二人の間に沈黙が漂う。まるで暗闇が性質を持ったのではないかと錯覚するほどの沈黙。

「どういふ……」

ようやく声を絞り出したものの、それはうまく文章にならなかった。

「そのままの意味です。人類はどこまで生きられるのか。不老長寿は何千年も研究されていたことです。」

お父さんは表向きで医者をする反面で研究をしていました。お母さんと出会ったのもその研究の繋がりらしいです。最初は食屍鬼であるお母さんが研究対象だったらしいですが、次第に恋仲になっていったということ聞いたことがあります」

そんな研究が現代で行われていたことに清秋は驚いた。

たしかに現代医学の発展は目覚ましい程だが、それはあくまでも科学技術、医療技術といった観点からであって、怪物の生命力を利用するなどというオカルト染みた方法など聞いたことがない。

よく話を聞くと、最近の癌研究やi p s細胞の発見とも深く関係しているらしい。

「私にわかるのは不死関係する何かだということぐらいで、実際に何を見つけたのかは……、でもお姉ちゃんが生き返ったのは何か関係があるのかも」

どうやら彼女の知っている情報はこれだけのようだ。それに、話している間に二葉も落ち着いてきたらしい。

ちらりと公園の外に眼を向けると、杉山が車を着けて待っているのが見えた。ハザードランプを点灯させていつでも発進できる状態。時計を確認すると、三十分程話しこんでいたらしい。先に向かった出魅は待ちくたびれていることだろう。

「じゃあ僕は病院に向かうけど、二葉ちゃんはどうする？ 出魅さんから連れてくるようには言われてるけど、僕は無理に連れていかなくてもいいと思ってる」

「行きます」

最初から答えが決まっていたのかは分からないが、二葉は即答だった。

「行って真実を確かめます。お父さんを問い詰めないといけませんし。それにもう一人、お姉ちゃんも来てるかもしれないしね」

真っすぐ清秋に向けられる眼には力が籠っており、そこにはいつ

も通りの生き生きとした活力がみなぎっているように感じられた。

第十六話…侵入作戦

杉山の車に揺られること約三十分、清秋達は前寫医院に到着した。病院に面した路上に車を停めて病院の正面に向かうと、そこでは出魅が「遅かったじゃないか」と言いたげな表情で視線をちらりとよこした。

「先に到着してたなら入ってればよかったじゃないですか」

「何を言っている葛葉清秋君。そんな事ができたらとつくにやっているし、もともと君達が到着した時にはすでに仕事を終わらせている予定だったのだよ」

そう言うとお出魅は視線を病院の正面玄関に向けた。

前寫医院は二葉の父親である前寫源二が院長を勤める病院である。名前だけ聞くと個人経営の町医者を想像させる名前だが、この地域で一番大きい施設を有する総合病院だ。

病棟は診察や怪我の治療などを行う一般病棟、入院患者がいる入院病棟の大きく分けて二つに区分けされており、上空から見ると渡り廊下を加えてエの字型の建物になっている。

その正面玄関は道路から数十メートル先にあり、大きく開けた広場になっている。さらにその玄関は一般病棟に繋がっており、夜は人がほとんど入院病棟へ行ってしまふのか、光が漏れているまどはほんの数えるほどである。

「あっ」

そこで清秋は気付いた。正面玄関の周りを取り囲むように多くの影が徘徊している。まるで墓からはい出してきたゾンビのようにゆっくりとした動きで無造作に数十の影があった。

「どうやら見張りがいるらしい。私だけで突入しても問題ないのだが、あれだけの人数となるとさすがに時間がかかってしまつて前寫医師に逃げられてしまうかもしれないので、君たちを待たせてもらったよ。二手に別れて侵入しようじゃないか」

出魅はいつものように何かをたくらんでいるのではと思わせるシニカルな笑みを浮かべている。

「ふたてに別れるってことは僕と二葉ちゃんが外の見張りを担当ですか？」

「馬鹿か君は。あれだけの相手を食屍鬼である前寫二葉君はともかくとして君が相手をできるわけないだろう。一呼吸する前に肉塊へ変えられてしまうのがオチだ」

確かに出魅の言う通りである。戦闘などしたことがない清秋があれだけの人数——しかも恐らく彼らは一般の人ではないだろう——を相手取ることができるはずないと自分でもわかっている。

となると侵入して前寫源二を捕まえるのは誰なのだろうか。

常識で考えると今回の事件の指揮官的役割を担っている出魅と警察である杉山が前寫源二の身柄確保を行うのが適当だろう。

しかし先程出魅が言っていたような戦闘面では恐らく出魅が断トツで一番、杉山の實力については清秋にはわからないが、こういった事件を担当しているなら人外の生物との戦闘も慣れているはずだ。そうなる就先程考えていた配置とは逆に出魅、杉山ペアがこの場を引き受けることになる。

「私と前寫二葉君がここを引き受ける。葛葉清秋君と杉山浩太君は隙を見て病院内に侵入して、前寫源二を確保してくれたまえ」

「ちょっと待ってください。さっきの話だと戦闘力の高い二人が残る方がいいんじゃないですか？」

「ほう、どうやら勘違いしているらしいな。人を見た目で判断してはいけないよ。杉山浩太君と前寫二葉君を比べると、圧倒的に前寫二葉君の方が強い。一般人と食屍鬼の力の差はそれほど圧倒的なものなんだよ。それに……」

すると出魅は少し小声になって清秋に耳打ちをするようにして「自分の父親を確保なんてどんな人でも好んでしたいとは思わないだろう？」

一言言うとなぐらに出魅は元の姿勢に戻って腕を組み、話を続けた。

「そういうわけで私達はこの見張りを引きつけておくから君達は隙を見て突入するんだ」

「入ってからの行動はどうすればいいんですか？」

「良い質問だね、杉山浩太君。それを今から言おうと思っただよ。まずこれを見てくれ」

出美は制服の胸ポケットから折りたたまれた紙を取り出した。

何重にも畳まれていたらしく、広げるとポケットサイズの紙切れが少し大きめのノートサイズになった。

開かれた紙に書かれていたのは建物の間取り図。現状から考えるところの病院のものと考えるのが妥当だろう。

「今私達がいる玄関前がこのあたり」

そう言うところからとりだしたのか、黒いペンで玄関を示す記号の下にある余白スペースにバツ印を付ける。

そして次は赤ペンに持ち替えて黒で書いた周りに数個のバツを描いて行った。

「そして玄関の周りには見張りが多くいる。これは私と前寫二葉が相手をしてなんとか玄関への道を作る。君達は隙について突入してくれ」

「その後の行動は？」

「玄関に入ると待合室として開けた場所になっている。君も一時的だが入院していたから分かっているだろう？ 院長の部屋はこの一般病棟の最上階、七階の一番端に位置している。エレベーターを使えばすぐに着くが、控えた方がいいだろう。ドアが開いた時に待ち伏せされていたら逃げられなくなる。階段で向かってくれ」

出魅は蛍光ペンで各階の階段がある位置を塗りつぶす。

階段は玄関を入れて左奥、そのまま上階に向かい、五階で一度廊下に出てから廊下の反対側に向かわないといけないらしい。

「院長室に到着したら前寫源二を確保。それが完了したら私に連絡をくれ」

「わかりました」

「あと、何かがあったとしても騒ぎは起こさないように。万が一前
寫源二以外の医師や看護師が残っていたら面倒なことになる。あと、
懐中電灯などの灯りは使わないように」

「それだと視界が悪くなるんじゃない？」

いくら見つからないようにするといっても灯りもなしに照明の消
えた建物の中に入るのは無謀というものだろう。万が一敵に襲われ
た場合、敵味方の区別がつかなくなってしまう。

「暗闇で電灯を持っていたら自分の一を知らせているようなもので
はないか。視界の方は心配いらない。君は一度ヴァンピールに襲わ
れただろう？」

「……！」

清秋は気付いた。確か出魅と初めて会った時の説明で自分が吸血
鬼になってしまったということを聞かされた。

しかしそれはあの時の吸血鬼化を止める薬を打たれたはずだ。

「葛葉清秋君、君に打った吸血鬼化拮抗剤は君の吸血鬼化を遅らせ
るだけであって、決して吸血鬼化を阻止する訳じゃないのだよ。長
引かせて三日、恐らく明日の夜中には君は吸血鬼になってしまっ
たろうね」

「そんな……」

「まあ心配しなくても大丈夫だ。吸血鬼の血液はその親、つまりも
ともとの持ち主の指示には従う。今回の事件を解決すれば君の吸血
鬼化を止める事もできるだろう。それに吸血鬼化途中は良い事もある
んだ。少し紫外線に弱くなるものの、一時的に吸血鬼の能力を使
う事が出来る。正確に言うとか常人以上の治癒力と夜目が利く事、そ
の他身体能力の強化、爪や歯が鋭くなる。それだけあれば照明の無
い建物内で敵に襲われたとしても問題ないだろう」

「でもそれは相手が人間だった場合でしょう」

確かにそれだけの能力があれば襲われたとしても大丈夫だろう。

しかしそれは襲う相手が一般の人間である事が前提で、もしも吸
血鬼、もしくはそれと同等の力を持つ者であった場合、清秋の得た

能力は微塵もアドバンテージにならない。むしろ戦闘の経験のない清秋は相手より劣ってしまうだろう。いままでスニーカーでサッカーをしていたのをスパイクに履き替えても、相手がプロでは勝てるはずがないのと同じである。

「不安ならこの前渡した銃もある。飛び道具があれば少しは安心するだろう？　だがあまり多用するなよ。あの銃は魔力をエネルギー源にしているから、不安定な君の魔力だと暴発するという可能性もある」

「まあ危ない時は僕もフォローするから大丈夫だよ」
横から杉山が胸を張る。

「というか実際はフォローはこちらの仕事で、立場敵にも経験的にも杉山が先導してくれるのではないだろうか。」

襲われる事を想定していかないのか、杉山自身もそれほど経験がないのか清秋は少し不安に駆られる。それとも先ほど出魅が行っていたように吸血鬼と一般人との実力差もそれほど大きなものなのかもしれない。

「さて、話している内にこんな時間だ」

時計を確認するとすでに短針は十二の値を過ぎており、日付が変更されていた。

「言っておくが玄関までの道を空けるのは一瞬だ。あれだけの人数を抑えるのは、いくら私でも難しいのでね」

出魅は両手を前に突き出す。その先にあるのは一般病棟の玄関、そしてそれを取り囲むように立っている数十の黒い影。明らかにそこは嚴重に固められていることは見てとれた。

「三、二、一でこじ開ける。いくぞ、三」
出美が両手に力を込めるのがわかった。

「二」

清秋と杉山は両足に力を込めて目的地、病棟の玄関を真っすぐ見据える。

「一！！」

ズン！

という音が清秋の耳に響く。前方に眼を向けていた清秋にはそれが何の音なのかすぐに分かった。

人垣が一気に割れる音。

出魅は言葉通りに両手で道を『こじ開けた』。

強大な力によって左右に分かたれた道はまるで神話に登場する海を割って造られた道の様だ。

「早くしろ！ 長くは持たん！！」

目の前の光景に呆然としていた清秋はその言葉で我に帰り、両足に込めた力を一気に解放する。

その瞬間に自分の目線が一気に数メートル前方に移動した。地面を蹴る力は自分の予想をはるかに強く、反動で転びそうになる体をなんとか制御する。

これが吸血鬼の運動能力というものだろうか。気付けば玄関までの道のりの半分を迎えていた。

左右を見ると、生きた屍のような人々が自分に向かって襲いかかろうと必死に両腕を前方に突き出している。しかしそれは見えない力、出魅の自由自在によって堰き止められ、清秋と杉山に届く事はない。

しかしもうすぐ玄関にたどり着くという時、崩壊は突然起こった。引き金は一瞬の光。それは閃光弾のように強力な光ではなくカメラのフラッシュのような弱い光。

にもかかわらず、清秋は眼の奥が強烈に熱くなるのを感じた。動けなくなるほどの痛みという訳ではなかったが、炎であぶられたようなヒリヒリとした痛み。

「止まるな走れ！！」

後方から出魅の叫び声が聞こえる。その声はいつも冷静な声を発している出魅からは考えられない切羽詰まった声だった。

それもそのはず、左右に割れていた人垣が崩れ、次々と清秋達めがけて襲いかかってくるではないか。出魅が押さええていたにもかかわらずなぜそう言った事態に陥ったのかは分からないが、まずはこの怪物達から逃げるのが最優先だ。清秋は傍らで怯んでいる杉山を担ぐようにして一氣に玄関へと走る。

これも吸血鬼の身体能力向上のおかげなのか、杉山を肩に乗せた状態でも常人よりはるかに速く走れる事が出来た。

しかしそれでも左右から伸ばされる魔の手を全て避ける事はできない。襲いかかってくる数体を空いた片手で思い切り殴りつける。

すると予想以上の威力で清秋の拳は相手の体に突き刺さり、そのまま数本の骨が折れる音とともに吹き飛ばされた。

そうしてなんとか玄関にたどり着くが、診療時間の過ぎている自動ドアはもちろん開くはずがない。この状況でまだ一般人の思考が残っているのか清秋は一瞬躊躇するが、目の前の扉は銃声と共に突然碎け散った。

横に降ろした杉山が発砲したのだ。

「こういう時は頭で考えるんじゃない！　といってもこういう事は慣れてないから普通の反応だけだね。さあ行くよ」

「はい」

後ろからは後続する屍達が清秋達を追いかけてきている。それらを振り返らずに、碎かれたガラス片を踏みつぶしながら、二人は闇に満たされた病棟の中へ足を踏み入れた。

第十七話…戦闘開始

清秋達が突入した後を追って多くの屍が病院の玄関に殺到する。しかし一人として病棟内に足を踏み入れる事が出来る者はいなかった。なぜならばそこには大きな障害があるからだ。

「彼らの邪魔をしないでくれたまえ」

まるで子供をなだめるかのように穏やかな口調で、しかし一方でその体は一般人では視認できない程の運動をしている。

向かってくる敵をまるで巨大な壁が存在しているかのように撥ね返している。

「なんだ、視界を封じたと思ったのに……。その様子だと全然堪えてないみたいね」

そんな出魅に放たれる闇からの声は聞いただけで凍てついてしまいそうな冷たい声。その声は出魅は一度聞いた事があり、二葉にとっては昔から慣れ親しんだ声。

前寫一葉が闇の中から姿を表す。

「いいや、先ほどのUVバンは効いているよ。その証拠に私の視界は『夜にもかかわらず』真っ暗だからね。血液を摂取していない吸血鬼には紫外光は有効だ。幸い私は昼間に飲んだ葛葉清秋君の血液が微量だけ残っていたものの、網膜にはダメージを与えられたらしくて全く見えない状態だよ。」

「それはよかった。苦勞して手に入れた甲斐があったわ。でも見た感じではそこまで苦勞していないみたいだけど？」

「しているさ。私の能力は『視認したものを自由に操作できる』だから、今みたいに視界を完全に封じられたら便利な能力も完全に使えなくなってしまう」

コントローラー

出魅の使う自由自在は視認したものは何でも操れる実に協力的な能力だが、その反面で視界を封じられたり、空気の流れなどといった見えないものに対しては全く効果を発揮しない。先ほど清秋達を襲

う者達を抑えつけていた力が無くなったのもUVバンによる網膜破壊で視界を失ったからである。

「それに肉弾戦も結構苦勞するのだよ。目が見えないものだから臭いと音、あとは肌の全神経を使って空気の微妙な動きを感じ取らないといけないのだからね」

しかし視界を奪われたからといっても戦闘面では常人よりはるかに上をいく。

吸血鬼の嗅覚、聴覚、触角、全ての感覚器官は人間よりも、いや、この世の生物で一番と言って良いほどのスペックを有しており、半径十数メートル以内なら物や人の一をほぼ完璧に把握する事ができる。

「そこまでの力を持っていれば一人で突入しても問題は無かったんじゃない？」

「そうだね、確かに私の力があれば単身で乗り込んで前寫源二を取り押さえてもお釣りが出るくらいだ」

思ってもいない言葉にずっと話を聞いていた二葉は絶句する。では先ほど決死の覚悟で乗り込んでいった少年は何だったのか。

中に入れば安心と言う訳ではない。むしろ敵の本拠地なのだから危険はこの場よりも大きくなるだろう。

「じゃあ何で清秋さんを……」

「前寫二葉君。君は自分が主人公だと思った事があるかい？」

二葉の質問を遮って質問を覆い被せてくる。しかし、答えを待たずに出魅は続けた。

「人は自分の人生の中では主人公だ。それは人によって様々なジャンルの物語の主人公になる。人一倍喧嘩をする者は学園不良もの、スポーツが得意な者はスポ根、靈感があるものは怪談の主人公になるかもしれない。特に起伏の無い人生を過ごす者でさえ新聞に載っている日常系の四コマ漫画の主人公になるかもしれない」

喋りながらも襲ってくる敵を軽々と撥ね返しては地面に叩きつける。その表情は一片の疲労もなく、むしろ生き生きしている程だ。

「しかし葛葉清秋君のようなパターンは珍しい。彼には力がある、そして才能も恐らくある。ついでに付け加えると彼の物語は今始まったばかりで、まだ起承転結の中でも『起』の序盤でしかない。この意味がどういう事か解るかい？」

質問に対して回答はない。一人は全く答えが思いつかず、もう一方は特に答える気もない。

「物語の主人公というのは困難に立ち向かうほどにその力を発揮して強くなる。窮地に立たされた主人公が隠れた力に目覚めるというのは物語の鉄則だろう？ 葛葉清秋君は英雄になりうる資質を持っている。それはゆっくりと育てていかなくてはいけないのだよ」

「そんな鉄則が現実世界で通用するかしら」

一葉は同意できないという意思を示す。しかしその言葉は議論をしようというものではなくただの戯れ。別に今すぐにでも戦闘を仕掛けてもよいのだ。

「私は君達の何十、いや何百倍といった君達では想像が出来ないほど長い人生を過ごしているのだよ。その中で人の人生をいくつも見てきた、もちろん自分自身もね。」

「へえ、じゃああなたはなぜ主人公らしく堂々と単身で乗り込んでいかなかったの？」

「ふんっ、それはナンセンスな考えだよ前寫一葉君。先ほども言ったと思うがこの世に生きている時点で全員が主人公なんだ。主人公が全員主人公の役割を果たし続けていたら物語にならないだろう？ 時には脇役に、時にはライバルになる事によってこの世界は成り立っている。しかし本人達は各自で重要な役割をしていて、彼ら自身は各々の物語の主人公を演じているのだよ」

すでに出魅に襲いかかる者は始めの十分の一程度にまで数を減らしていた。

早々にやられた者はしばらくすれば復活するものの、回復のスピードよりも出魅による破壊のスピードの方が圧倒的に速い。あと数分もしない内に全員がやられてしまうだろう。

「つまり今回は葛葉清秋君から見れば私は脇役、君は悪役の手下、前寫二葉君はヒロインと言ったところかな。だがこの場、この時は……」

そこで出魅は言葉を切って残り少ない目の前の敵を一気に吹き飛ばした。

そして背筋を伸ばして胸を張り、腕をしっかりと組んで視力を失ったはずの両眼で一葉の方を真つすぐと見据える。

「私が主人公だ!!」

威風堂々と、泰然自若に、凜々しくも、悠然とした、まさに主人公^ロと誰もが異を唱えられないような立ち姿だった。



ロビーに侵入した清秋達は出魅に言われた通りに階段を使って最上階にある院長室に向かっていた。

周りは非常扉を示す緑色の照明と最低限小さな灯りが点いているだけで、一般人だと走るのが不安になる程の明るさだったが、清秋の視界はくつきりとした、昼間の明るい中を歩く時とはまた違った景色がクリアに広がっていた。

杉山も杉山で、サングラスのようなゴーグル——本人曰く魔力を使った暗視ゴーグルのような物らしい——を装着していたので障害物で躓くと言った事は無い、と言っても障害物など置いていないの

だが。

「ところで杉山さんって出魅さんとはどういう関係なんですか？」
侵入直後はいつ敵が襲いかかってくるものかと警戒していた清秋だが、二階に到着した今でもそういった気配は微塵も感じられないので張りつめていた気分も少し緩み、杉山に抱いていた疑問を投げかけてみた。

「どういうって言われると困るんだけど、唯の知り合いかな」
ありきたりな回答が返ってくる。

清秋自身も特に複雑な関係を期待していたわけではない。

「と言っても始めに知り合ったのは昼の方の出美さんなんが先なんだけどね。その時はまだ僕も新米、って言っても今もそんなにベテランって訳じゃないけど。その頃に捜査していた事件でね」

「出美さんが何か事件に巻き込まれていたとか？」

「違う違う、彼女はただ怪事件を探していたらしくてね。たまたま僕が立入禁止になってる事件現場でいたところに彼女が現れたんだよ」

その時の事を思い出しているのか杉山は苦笑交じりに話す。

出美は大方今回のように変わった事件をさがしていて、一人で捜査をしていたのだろう。

「その後も事件が起きる度に彼女に会うんだ。あの時からよく鼻の効く子だなと思ってたよ。小学生か中学生ぐらいの子が事件の度に、しかも非科学現象捜査課の担当する事件のみ絡んでくるんだから。後から考えると深層心理で出魅さんとながっていたんだろう」

恐らく夜は夜で出魅がその事件についての捜査をしていたのだろう。というか今でこそ先輩だからあの話し方や態度を許容できるものの、年下の小学生や中学生がああ状態なのはすごく違和感があるだろう。

「というか丸つきり今回の事件と展開が似てますね」

「うん、というかいつもこんな感じなんだ。彼女の関わる事件と言うのはいつも厄介な事が多い。僕達では解決できないようなものや

誰も不自然に思わないような事件、そういった時にいつも彼女が現れるんだ。だから僕達の中では『清水出魅には関わるな』っていう言葉が口癖みたいに言われてるよ」

なるほど、家に刑事が訪問してきた時に山口という刑事が言っていたのはそう言う事だったのか、と清秋は心の中で一人得心する。

「まあその時も僕がろくな目に遭わなかったんだけど」

「何かあったんですか？」

「その時の事件も吸血鬼がらみでね。僕はその被害者になって相手の吸血鬼に殺されそうになったところを彼女に助けられたんだ。今みたいに彼女に協力しているのもその時の借りがあるからかな。こうやって直接彼女と協力するような事はその時以来ほとんどなかったけど、警察しから知る事の出来ない情報を提供したり、昼の彼女の身の安全を守ったりとかはずっとしててるよ」

ということは出魅が少なくとも中学生のころからずっとこういうことを続けているのだらう。今回の件で出美にも出魅にも振り回されている清秋にとっては、こう言う事を何年も続ける事を想像すると気の遠くなる事だ。

その点で杉山の忍耐力には恐れ入る。悪く言えば年下の女性の言われるがままに振り回されているのだ。命を助けられた事によってあこがれのような物もあったのだらうか。

「さてと、昔話もこれぐらいにしようか」

そう言うのと杉山は立ち止る。丁度五階の階段を上ったところだ。

そこで階段は途切れており、廊下の反対側まで行かないと上階に到達することはできない。

しかし廊下が一直線になっている訳ではなく、階段をの踊り場から進むとそこは一階のロビーのように開けた場所になっている。診察の結果などを待つところなのだろうか、病院にあまり縁がない清秋には想像できないところだ。

ただ、その広場が何に使われているとか言う事はどうでもよかった。

問題はそこにいる多くの影、恐らく玄関前と同じような見張りなのだろう、ゆらゆらとした動きの影が十余人程徘徊している。

「どうするんですか？」

「あれだけの人数だと気付かれずに通り抜けるのは難しい」

杉山はスーツの中から黒い銃を取り出し、外国の映画で良く見るようにグリップを両手で握り、銃口を上向きにして構える。それを見て清秋も銀色に光る銃を取り出し、見よう見まねで構えた。

「一気に走り抜ける！」

第十七話：戦闘開始（後書き）

話も終盤にさしかかってきました。

感想、評価などいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1979n/>

ヴァンパイア・イン・ザ・スクール

2011年8月21日03時31分発行